
自由人北郷一刀の物語

Mr10yen

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自由人北郷一刀の物語

【Nコード】

N7002H

【作者名】

Mr10yen

【あらすじ】

高校2年の青年、北郷一刀がある事件で異世界に飛ばされる。諦めることなく、理想に向かう少女に出会い……。一刀は何処へ向かい、何を求めるのか？

零（前書き）

これは主人公最強物です。

一刀がややオリ主化しています。

苦手な人は見ないことを勧めます。

零

これは、ある少年の物語。

無限に存在する平行世界の中の1つの物語。

可能性であり、未来にあったかもしれないもの。

始まりは、主人公が友達と組んだバンドが成功しファミレスでお祝いをしていたところから

「はははっ、やったな一刀」

「いやいや、お前が入ってきてくれたおかげでさ……………もう女の子にモテモテでさ」

「あはは、それってあまりオレ関係ないような……………」

この物語の主人公、北郷一刀は苦笑いしながらバンド仲間たちに向ける。

「いやいや、ご謙遜めさるな。一刀がオレらのバンドの最後にして最大の穴だった、ギターを引き受けてくれるって言った時はもう……………」

「ああ、あの時のお前すごかったな……………」
1人が引き気味に言う。

「引くなよ！4人でバンドをしようと思った時、ギターがいらないだろうし……………そうになっていた時現れた救世主がいなかったら……………オレ達は……………」

そんな感じでリーダーさんが過去の回想に入り2時間に渡りもり上がり続けた。

ようやく、終わり一刀は携帯を開く。

「あゝ、もう1時だよ……。爺さんからメール？機械はさっぱりとか言ってもうメールうてるまでなったのかよ。爺さんは……」

呆れながら、内容を確認していった。

「うわっ、明日5時までについて……。はあ」

ため息をつき、これもなれたことと言うふうには自転車に乗り。

「帰るか……」

彼はまだ知らない。

自分に向かってきていた運命の分岐を。

それでも、彼は進む。

例えば死がその先にあると、幸福がなかろうとも。

おそらく、彼は進み続ける。

巻（前書き）

文才がないです。

ごめんなさい、でもがんばります！

壱

「はっ！」

刃と刃がぶつかり合い、火花が飛び散る。

静かな道場の中、2人の剣士が戦っていた。

もちろん、真剣でだ。

現代では、真剣を扱えることに意味はないだろう。

だが、北郷一刀の祖父はそれでも孫の一刀に剣技を教える。

一刀が教えを請うたのも理由の1つだが、これが祖父と孫のコミニケーションでもあるのだ。

そして、このコミニケーションと言う名の真剣を使った戦いは1週間に1回行っているのだ。

「はあ、はあ。やっぱり、爺さんには勝てねえ」

天井を見つめるように倒れた一刀がいた。

「はっ、何が勝てねえじゃ。2時間以上もねばったくせに、祖父を早死にさせる気か？」

結果、2人は息がきれていた。

実戦の差だろう、倒れている一刀と比べて祖父は立ったままだ。

「時に一刀」

祖父は思い出したように口を開く。

「何だ、爺さん」

「あれは何じゃ？」

アレとは、今の一刀の必須アイテム。

ギターを入れるケースだ。

「ああ、ギターを入れるやつ」

「ふむ、さすが孫ということか……………」

「？いきなりなんだよ？」

「誤魔化せると言うてか。三重、いや四重のケースか」

「何で見ただけで分かるんだよ？」

「祖父をなめてはいかんという事じゃ」

1段目に普通にギター、2段目に予備の服。3、4段目はたまにある特殊な仕事の道具がある。

これは、確実に100キロ近くいくのだが一刀が普通に持っているのを見ているため誰も気がつかない。

「100キロを持つ高校生か・・・一刀。将来の夢はボディビルダーだったか？」

「違うって！そもそも、ないから夢なんて」

苦笑いし、とにかく誤魔化すことに専念する。

その後、祖父にからかわれたが何とか逃げてきたのだ。

「年甲斐もなく元気だな爺さん。恩を返すまで・・・いや、恩を返しても120くらい生きてくれよ」

無茶な事を言っているが、一刀にとって本気というのだから怖い。寮に戻った一刀は荷物を纏めていた。

別に追い出されたとか、騒ぎを起こしたわけではなく1週間前から長期休暇に入ったので両親の墓参りに行くところなのだ。

「九州か、遠いな・・・」

バンド仲間に九州に墓参りに行くと伝えたと、バンド仲間の1人の及川が

「かずぴー、お土産頼んだで！」

分かってはいたが、いつもの事なのでみんなでフルボッコにして

「じゃあな、帰ってきたら連絡する」

と、みんなに見送られて昨日を終えたのだ。

荷物を纏めて、おなじみのギターケース（四重仕込み）を背負い一刀の所属している学園。

フランチェスカ学園から出ようと思っていると。

「おっ！北郷、いいところに」

友人に見つかった。

しかも、いいところって……オレにとって良くないことだな。

オレの前まで来ると、いきなり頭を下げ。

「悪い、北郷。今日はデートでさ、バイトが足りないんだ。だからさ、バイトの方出てくれない」

「その日のバイト代くらいは、貰っていいんだよな？」

「そりゃ、もち。ok」

「はあ。分かったよ、代わってやる」

こいつは、事あるごとにオレに代役を頼むやつだ。

おかげでこいつのバイト先の博物館のオーナーとは知り合いになっていた。

まあ、夕方でもチケットとかあるよな。

頼みごとを断れない自分を恨みながら、博物館の方へと歩いていく。え？及川？うん、あれは別種、と言うより別物、分別すう必要があるから。

そして、オーナーから直接給料をいただき急いで空港を目指したいのだが……。

気になるのだ。

警備の途中に殺気がこもるほど、銅鏡をみていた男が。

あいつの目は一般人の目じゃない。

まさかとは思うが、用心に越したことはない。

「当たり、かよ」

博物館に着くと、入り口から少し離れたあたりで会ったのだ。銅鏡を殺気がこもるほど見ていた青年が、そしてその手には

「おい、あんた。昼間にその銅鏡を見てた奴だろ？駄目だぜ。窃盗

は………!」

言いかけた途中、この男はオレの顔に向かって蹴りをしてきたのだ。

「危ねえな、何すんだよ!」

「避けただど?」

こいつにとつてはオレが避けた方が驚く対象になったらしい。

「まあ、やるなら……手加減はしねえぞ?」

「ふん………来い!」

旅行用のカバンとギターケースを降ろし対峙する。

オレの本分は剣だけど、多少なら体術もできる。

「後悔するなよ!」

殴りかかるが、全て避けられた。

同じく、奴の蹴りも避けてやった。

これじゃ、きりがない。

なんとかして決めないとな。

「仕方がねえな」

「何?」

オレはギターケースの側面を軽く蹴る。

すると、一瞬だけ開き3段目にあった日本刀が跳ね上がってきた。

日本刀を吐き出したギターケースは素早く閉じ。

鞘のまま、切りかかる。

「さてっと、終わらせるぜ!」

剣を横に構え

「っ!」

「空燕」

横に一閃する。

刃からは三日月を模した、衝撃波が放たれ奴を貫くはずだったが……

「くっ!」

回避をしようとして失敗したらしく、オレの放った空燕は銅鏡を貫いた。

パキイイイイイイイイ

高い音を立てて、砕け散った。

「え？マジで」

「くそっ！貴様アアア！」

「待て、オレが悪いの？」

何とかしようと、焦るオレに追い討ちをかけるように銅鏡が光を放ち。

「外史への扉かつ！」

「え、何？外人への扉っ！？」

「外史だっ！」

ツッコマレマシタヨ？オレ。

何てふざけるうちに、銅鏡に引き込まれ
な、何だよコレ！？

銅鏡が人を引き込むって！

「くそっ！必ず殺してやるぞ！」

結局、オレが悪いの！？

銅鏡に飲み込まれながらも、ツッコミを忘れないオレがいた。

壱（後書き）

一刀君、バイトを引き受けて不審者と戦い、銅鏡に引きずり込まれる。そんな感じでした。

一刀君に明るい未来がきたらいいなと思います、まる

式（前書き）

おなじみの文才ないです。

ごめんなさい、誤字等ありましたら教えてくれるとたすかります。

式

熱い、体中が熱い。

目を開けると、見渡す限りの地獄が広がっていた。

大火災、その言葉でも足りない。

家という家は1つも存在せず、壊れていた。

体は動かない。

目を動かすと、自分の両親だったものがあつた。

声が出ない。

頭が痛い。

焼けそうだ、体が焼けそうだ。

見れば、あたりは全て炎。

隣の家どころか、自分の家以外の家も焼けていた。

1つだけ分かった。

自分はもう死ぬのだ、と。

次に目が覚めると、病院だった。

医師いわく

「君だけが、幸い助かったのだよ」

そう言った。

ならば、両親は？近所の友人たちは？

誰も生きていない。

自分も死ねていたらどんなに楽だっただろう。

親もいない、自分なんか・・・誰も頼る事できない。

そう思い療養を続けていると、祖父が来たのだ。

祖父はオレは僕を抱きしめ。

「一刀お、一刀・・・」

泣いていた。理由は分からなかった。

自分は責められてもいいのに、何故自分だけが生き残ってしまったのだ

僕もあの時に・・・

「！」

目が覚めた。

だるい、体が重く感じる。

「あの時の夢か・・・」

当分見ていなかった、最悪の夢。

思い出したくも無い。

「いかん、いかん。思い出すな、平常心だ、平常心を保て・・・」

さて、今は何時かなと思いつ計を見ようとしたのだが。

「アレ？何で・・・オレは荒野のど真ん中に放置されてるんだ？」

目が覚めると、あたり一面は荒野だった。

「落ち着こう、落ち着こうぜ、オレ。昨日は寝る前にどこで何をした・・・」

両親の墓参りに行こう！↓友達と会う。アルバイトの代役を頼まれる↓やれやれと思ひ引き受ける↓無事にバイト終了。

ここまでは、何も無いはず。

「・・・ん？何で日本刀を持ってるんだっけ？」

旅行用のカバンにおなじみギターケース。

そして、手には日本刀（鞘あり）が。

「そうそう、殺気だったあの野郎と対峙して・・・・・・・・・・」
銅鏡を割った↓銅鏡に吸い込まれた。

「まさか、あの銅鏡・・・・・・・・・・」

思考を巡らす。

少しばかり裏の事に関わった中で、該当するのは・・・・・・・・・・
「・・・・・・・・・・そうか！ドラ○もののどこでもドアかつ！」
・・・・・・・・・・ごめんなさい。該当するものが1つたりとも無かったです。

「はあ、とりあえず。日本じゃないよな・・・・・・・・・・」
見渡すも、荒野と山のみ。

村ぐらいなら探せば見つかるだろう、などと樂觀視してギターケースを背負い、カバンを持ち、さあ、行こう。

「おい、小僧」

行けませんでした。

「えーと、僕ですか？」

自分を指差しながら聞くと、男が嫌な笑顔で

「おめえ、以外に誰がいるんだよ？」

ですよねー、などと思いつつ。

「アニキ、こいつ珍しい物持ってますぜ」

何か小さい人が、オレの持ち物を見て言う。

「確かにね、おい小僧。命が惜しかったら、その荷物置いていけや」
古い恐喝の手段だね、希少だね。こんな事言う人。

よく見れば、格好も

「え、と。コスプレ？」

「はあ！？何わけの分からない事言ってるんだ！」
怒られました。

状況を整理しろ、オレ。

歩き出そうとした↓追いはぎらしき人に会う↓コスプレとかじゃないらしい。

結論、本物の追い剥ぎ。

「てめえ、さっさとしやがれ！」

小さい人がオレの手に剣を掠めようとしてきたが

「危ねえじゃねーかつ！」

回し蹴りを小さい人に決めてしまった。

首元に直撃し、更に吹き飛んだ。

「ち、チビ！」

リーダー格らしき人物があせり

「デブ、やっちまえ！」

なんか、人間の限度を超えて大きい人がオレと対峙してきた。

勝てるの？オレ・・・・・・・・

「ま、運が悪いと思って寝ててくれ」

日本刀を思いっきり顎にぶつける。

デブはその衝撃で後ろから倒れた。

一刀は顎を押さえながら。

「アレ、顎の骨砕けてないよな？」

まあ、それは置いといて。

「で、リーダー格のあんた。あんたもオレと戦うのか？」

「ひっ、お、オレは・・・・・・・・逃げる！」

言うよりも速く、逃げていった。

チビがデブを引っ張って。

「待ってくださいよー、アニキ！」

どこにあんな力が、などと思いつつ見送った。

「あっ、ここがどこか聞けばよかった・・・・・・・・」

後悔にかられた自分がいましたとき。

「桃香様！桃香様！どこに、居るんですか！」

私は目を離すとすぐどこかへ行ってしまう主を探していた。

妹分の鈴々も一緒に探すとは言っていたが、どうせ犬とでも戯れて

目的を忘れているだろうし。

探すこと10分。ようやく、主と妹分を見つけた。

「桃香様、鈴々！一体、何を・・・・・・・・・・！」

言いかけた時、主の桃香様が

「すごいんだよ！愛紗ちゃん。この人の占い！」

「占い？」

「うん！さっきも、あのお店で食い逃げする人が出るって言った直後に本当にやった人が出てきてね！」

子供のように語る主の隣で

「鈴々が捕まえたのだ！」

妹分が胸を張って言う。

「ねえねえ、管輅ちゃん。次はね。私達の事を占ってほしいの！私達は多くの人が幸せになるため、旅をしているの。でもね、私達には力が足りないの。だから、今の私たちに何か出来ることことがないか・・・・・・・・・・」

「なるほど、いいだろう」

水晶を数分見て、顔を上げ

「この地に天から遣いが現れる。その天の遣いは黒い服に身を纏った青年。本人には天の遣いという自覚はないが、その青年はこの地にある争いをなくす力を持っている」

「つまり、天の遣いの人が降りてくるんだよね？」

「その方が、この地に平和をもたらすと・・・・・・・・・・」

管輅は笑い、空を指差す。

「早速、参ったぞ。天の遣いが」

「「「え？」」」

空からは流星がまっすぐに村はずれに落ちていく。

「管輅ちゃん！あの流星に乗ってやって来たのが！」

「天の遣い、この地に平和をもたらすもの」

「ありがとう！急いで迎えに行かないと！」

桃香様が星が落ちた方向に向かって走り出した。

「鈴々も行くのだ!」

鈴々も追って行く。

「まったく、あの2人は……………」

私も追おうとするが

「まあ、待たんか」

管輅が私を呼びとめた。

「何だ？」

「お主には、恋の相が出ておるぞ」

「な、こ、恋などと! 軟弱な!」

管輅は私を笑いながら。

「まあ、お主だけではないがな」

私は顔を赤くし、急いで桃香様を追った。

その後言った、管輅の言葉を聞いていなかった。

「さて、天の遣いよ。お主はいかにして、人々を救うよ」
管輅はその場からまるで幻影であったかのように消えた。

さて、オレはさっき追い剥ぎを追っ払った。

「で、次は……………誰だよ」

追い剥ぎと入れ替わりに、女の子がオレの前に現れて

「……………」

見定めるようにオレを見ていた。

及川が居たら、速攻で口説きにかかって玉砕かな。

「えっと、どちら様で？」

とりあえず、さっきの奴らがコスプレじゃなかったようなので、この人も違うんだろうなと思いつながら聞いてみる。

「……………」

聞こえてないらしく、オレをまだ見定めるように見ていた。

「あのよ、聞いてるか？」

出来心で軽くデコピンを試してみた。

「あう」

可愛らしい声を上げて、額をさすっている。

「もう一回聞くけど、誰だ？」

「黒い服……」

黒い服？ いや、確かに今は黒い服だよ？ 私服だし……
何故だろう、この子を見ているとオレのS心が刺激されてしまう。
一刀の友人いわく

「そうだ、一刀は真性のドSだ」

との証言がある。しかも複数。

「天の御遣い様！」

そう言い、いきなり抱きついてきました。

「天のおつかい？ いや、子供じゃないからおつかいとかはちょっとなあ」

「おつかいじゃなくて、御遣いですよお」

「あゝ、ゴメン、ゴメン。キキマチガエタダケダヨ（棒読み）」

「う、うう……」

え？ 半泣き。ちょっと、速くない？

ちょっと、ふざけただけじゃん。

「悪かった！ オレが悪かったから泣くな、頼むから」
なだめる事5分。

「つまり、その占いで天の御遣いってのが出てきて。それで流星が落ちてきた場所に行くとオレがいた、と。だから、オレが天の御遣いとやらだと」

「うん、だから御遣い様。どうか、私達に導いて欲しいの」

「でもさ、オレは大したことができる人間じゃない。ただのダメで弱い存在ですよ」

「でもでも、罪のない人たちが死んでいくのは止めたいって、皆が笑い合える世界にしたいって、それは正しい事だって思いますよね

！」

一刀は目を細めた後、首を縦に振った。

「ああ、あればいい。皆が笑える世界があるならどんなにいいか……」

頭の中を色々な記憶が満ちた。

笑っている人達、自分に感謝をしている人達。

「だったら私達と一緒に来てくれませんか。天の御遣いの方となら皆を笑顔にする事も、きっと……！」

「そんな物を追ってどうなる。届きもしない、理想を追って死期を早めるだけに何の意味があるよ？」

「届くよ！ きっと、皆が力を合わせればきっと！」

「それでその理想を追って行く途中で死んでいった奴らの家族はどうなる？」

「それは……」

「家族を失った奴らは笑えないさ。大事な息子、親を失ったら。笑うことができないと、オレは思う」

「笑えるよ、きっと！」

少女は意地なりながらも言う。

「その根拠は何だ？」

「平和になるためには多くの人が死んでいくんだと思う。だけどね、笑っていないと、笑わないと、皆の笑顔のために戦った人達の思いが無駄になっちゃうから。だから、笑って生きるの！」

「……悪いが、オレには理解できない。思いがどうなろうと、辛いし悲しい。オレには解らない」
目を伏せ。

「オレは……」 「桃香様——！！」 「……はあ」

言いかけた時、違う声に遮られた。

黒い髪をした少女だ。

「この方が天の御遣い……」

「人違いだ。オレはそんな大層な者じゃない」

目を背けて答えた。

「でも、天の御遣い様じゃなくてもあなたは皆を救いたいとは思わないんですか？」

「救えるのなら、救いたい」

オレには無理だったが、と小声で言う。

自嘲気味に笑い。

「それでもな、オレには誰も救えない。オレは無力だ」

背中を向け去ろうとするが

「それは、私も同じで愛紗ちゃんや鈴々がいなかったら私も無力なんです。それでも、誰かを助けたい、救いたいって思う事は間違いないと思うんです！」

間違っていない。それはオレも分かっている。

けれど、どういう意思を持ってもオレは・・・・・・・・・・。

「すまない、オレには無理だ・・・・・・・・」

何度もあった。

色々な仕事をしてきた。

その度に助けられない人が居た、苦しむ人を助けられなかった。

オレは、彼女のような皆を救うと言う意思が、もう持てないのだ。

「そう、ですか。ごめんなさい、無理矢理、言ってしまったて・・・

・・・」

「いや、いいよ」

オレは笑って答えた。

背中を向けトボトボと帰る少女に向かって

「でもだ。もし、オレが君と次に会う時に天の御遣いとやらと会うことがなくて、オレのような無力な奴の力でも必要なら、オレにも君の理想を追う手伝いをさせてくれないか？」

オレはそう叫んだ。

彼女は振り返らず、俯いたまま。

「その時は、私だけじゃなくて・・・・・・・・」
大きく息を吸い込み。

「愛紗ちゃんや鈴々ちゃんと一緒に私を支えてくれますか？」
泣き叫ぶような声だった。

隣の黒髪少女はおどおどしている、その少女に親指をたて
がなばれという意味と

「おう！オレでもいいならいくらでも支えてやるよ！」
オレはそう返した。

その答えの後、少女は走り去っていった。
黒髪の少女も急いでそれを追って行く。

「あの黒い髪の子、苦労しそうだな。これから……」
後、胸が大きかったなああの2人などとシリアスを瞬時で捨て去り煩
悩に負けたオレがいた。

「仲間になったら、触らせ……つと、いかんいかん。自重
せよ、自重しろ、オレ」

煩惱を切り刻み焼き払うイメージをした後、歩き出す。

「あ……また、場所聞き忘れた……」
地面に頭をぶつけ酷い自己嫌悪に陥った青年が荒野にあったそうだ。

式（後書き）

まあ、こうなるわけで。

桃香たちとは仲間になりません。

この後旅に出て魏か呉に行かせるつもりです。
その後、董卓の乱で再会させるつもりです。

では、次回もよろしくお願いします。

参（前書き）

おなじみ文才がないです。

ごめんなさい。

今回は一刀が管輅が出会います。

参

拝啓、爺さん

なんか気がつくつと、わけが分からない場所にいました。

ここはどこだろうと彷徨っていると追い剥ぎに会いました。

その後は、見知らぬ女の子を泣かしてしまう結果がありました。

しかも、場所を聞き忘れ荒野を歩く事になってしまいました。

で、てきとうに歩き続けてようやく森の前まで来ました。

「そのの、お主」

さて、この手紙って爺さんが読む時ってのは近くに街があるのだとおもいます。

でも、ここ。圏外なのでこの手紙は届かないんだらうなと思います。

「そこで、手紙風に独り言を言っておるお主じゃよ」

えっと、おれ以外にも手紙を書いている人物もいるようです。

最悪、ポストでもあればいいと思います。

「黒い服のお主じゃよ」

手紙を書いているのはオレと同じ服のようです。

ここまで、他人と重なるのは怖いものがあります。

何か、最近呪われているじゃね。

そう思う今日このごろだったりします。

「おーい、聞いておるかー」

書いている途中、魔女のような帽子を被った少女が話をかけてきました。

知らない人なので無視を決め込もうと思います。

「お主じゃ、お主！」

怒鳴ってきました。

まったく、最近はいさ子までカルシウム不足なのでしょう。こんな小さな子まで簡単に怒るなんて怖い世の中になったものです。

「まあ、こんくらいにして。あんた誰だ？」

「今までの前振りを完全無視か。勝手すぎんか？」

「いや、そのくらいのほうが面白いし」

「はあ」

「溜め息つくと幸せが逃げるよ？」

「誰のせいじゃ！」

また怒った。

最近の子供は怒りやすくていやになります。

「それは、もういい！」

「はいはい。それで、どちら様ですか？」

「ふう」

ようやく一息ついたようで

「わしの名前は管輅。占い師じゃ」

「ああ、その手の詐欺は知ってるからパス」

「詐欺ではない！ちなみに悪質商法でもない！」

「分かった、分かった。んで、占い師様がオレに何の用ですか？」

「まずは、お主が知りたがっていた。ここがどこなのか答えよう」

「聞いてもないし、答えても金は払わねーぞ」

「分かっておる。ここは幽州。ここまで、言えば。分かるじゃろ？」

「何が？」

「~~~~っ！この世界は三国志という事じゃ！」

「そうなんだ」

リアクションが薄かったりする。

「リアクションが薄すぎるのではないか？」

「いや、実を言うと三国志知らないんだよね、オレ」

「っ！」

おお、この人のほうがリアクションすげえ。

「ちなみに社会とかでも三国志時代の頃だけピンポイントで寝てて聞いてない」

「っ！！！！」

「ゲームでも、FFかテイルズ、ドラクエぐらいしかやらなかったし」

「っっっ！！！！！！」

「やるとしても、戦国BASARAくらいだったけど」

「っっっ！！！！！！！！！！」

「更に言うと、三国志の本を見ようと思ったとき目次で読むのやめた」

「もはや、それは差別の領域じゃろ！」

あ、この人ツツコミが好きな人なのだろうか？

とりあえず、自分がツツコミをさせている自覚がない一刀だった。

「だから、どのくらいすごいかわかんない」

「むむむ、ならば。日本でいう弥生時代にタイムスリップしたと言うのは分かるか！」

「弥生時代？」

「そうじゃ、タイムスリップをしたのじゃ！すごかろう！」

「あ、ああ。すごいね」

「さらに言うと、ここはパラレルワールド！三国志の英傑たちが皆

女性という世界じゃ！」

「それは、すごいですね〜」

「って、少しは驚かんか！」

テンションがずっと低いままの一刀について管輅が怒った。

「おいおい、そんな簡単に怒ってたら早死にするぞ？」

「もうストレスで早死にしそうじゃよ！」

「んで、とりあえずオレは、平行世界的な世界に飛ばされたんだよな？」

「そうじゃ、分かっておるじゃないか！」

予備動作なく頭をいきなり管輅の頭を鷲掴みにし

「な、なんじゃ！？」

「どうしてくれんだよ。んな事やられたら、両親の墓参りできねえじゃねーか？」

ドスを聞かせた声で一刀が言う。

「ま、まあ。来てしまったものは仕方ないしの（汗）」

「八つ当たりしていい？切り刻んでいい？」

「ちよっ、まっ！女の子相手に日本刀で切るつもりか！」

「見た目だけだろ？見た目がガキで中身が最強の妖怪に会った事があるから、アレと同じって考えたら躊躇いなんか残らないって」

イイ笑顔でそうおっしゃった。

「わしは妖怪じゃない！お主が急に異世界に飛ばされて困っているところを助けようとしてやってきた、心優しい占い師じゃ！」

キラキラと目を輝かせ、言う。

そっちの趣味がある人は喜ぶだろうが、一刀にはなく。

「残念だったな。そういうのは東京でその趣味がある人にやるんだな」

「それやったら、わしがただでは済まんじゃろ」

「いいだろ、オレは困らない。ロリ占い師は困る。ほら、オレだけ笑えて問題ないだろ」

「自分勝手にもほどがあるじゃろ！しかも、ロリ占い師って何じゃ

！」

「うゝん。とりあえず飽きたから本題いこうか？」

「鬼っ！」

こうして管輅いじりをやめた一刀は再び管輅の話を聞く事にした。

「で、帰る方法がないからとりあえずは何とかして生きないといけねえんだよな」

「そ、そうじゃ・・・（いきなり真面目になるのか、調子が狂うのう）」

「それで、これからロリ占・・・管輅さんはオレにどうしたらいいかアドバイスをくれにきたと」

「今、ロリ占い師っていいそうになったじゃろ！コレ、こっちを見んか！」

「分かった分かった。とつとつ、アドバイスをくれ。それで、オレを喜ばす玩具にでもなってくれ。ヒマつぶしに使うから」

「わしはあんたほどの自分勝手な人間は見たことないぞ・・・・まあ、いい。とりあえず、置いておこう」

管輅は水晶と向き合い数分。

「ふむ、お主はこの森を抜けるまでにとっても良い拾い物をするじゃろう。そして、お主は今・・・何かを悩んでおるな？」

「・・・ああ」

木に背中を預けた一刀が答えた。

「それは、この森を抜けた先にある村で私塾をしておる・・・水鏡という女性に相談してみる事じゃ」

「水鏡？」

「さよう。私塾をしておる水鏡じゃ」

「水鏡ね・・・当たり前だけど、知らないな」

「そこでも、お主は良い拾い物をするじゃろう」

「具体的分かんないのか？拾い物じゃ、分かんないんだけど？」

「わしにも分らん。しかし、この森での拾い物は乗り物・・・とりあえず、移動速度が上がるものじゃ」

「なるほど、じゃ。行くか」

「待て」

「何だ？」

気だるげに振り返る。

「これは、何じゃ」

指さした先にあるのは、首輪。

管輅の首にぴったりのサイズで巻いてあります。

さらに、その首輪はしっかりと繋いである。

一刀が手に持つリードと。

「見ての通り、ペット」

管輅を指さして言った。

「オレ、ご主人」

自分をさしてそう言った。

「わしの人権は？」

「オレが自分以外の人権を尊重するとしても？」

「法律違反じゃろ！」

「いや、まだだろ。……この状態で街に出たり更にそこで……
……（以降、自主規制）……ってな事の事と更に……
（自主規制）……したぐらいで法律違反の一手手前ぐらいだ
ろ？」

「鬼畜じゃ、お主は鬼畜じゃ！」

「冗談も通じない世の中ってさびしいな」

「本当か！？ 冗談なんですよ、一刀さん！」

いきなり下手に出始めた管輅さん。

でも、そうしないといけないと身の危険を感じたようだ。

「当たり前だろ。いくらオレでもそんな事……あ、アリかも」

「お、お願いじゃ！ せめて、街だけは……！」

「冗談だって、本当に。いくらドSのオレでも本人が嫌がればやらないって（多分）」

「そ、そうか……」

ようやく、落ち着いた管輅を見て首輪を外し。

「ところでさ」

「なんじゃ？」

一刀が思いつきり腕を振ると、袖が暗剣がとび木の上から見ていた者にささった。

落ちてきたのは、妖術師の格好をした者。

「……」

「なっ、なんじゃ!？」

管輅の方が驚いていた。

「管輅さんが驚くって事は仲間どころか気づいてすらなかったって事か」

「い、一体いつから、いたのじゃ？」

「オレがここに来て、数秒経ったあたりから居たな」

「……こやつは、お主と戦った道士の仲間じゃな」

「何でそれを……こいつは道士なのか？」

「ああ、お主はこれからとんでもない事に巻き込まれるじゃろう」

道士の頭に刺さった暗剣をなんら躊躇いもなく抜き。

「かもな。それじゃ、助かったぜ管輅さん。あんたも気をつけろよ」

背を向けて、森を進んでいく。

「そうさせてもらう。……気を付けるのじゃぞ。この世界の唯一の光よ」

参（後書き）

一部、真面目他は遊び。

DSな一刀君の場面が多かった今回です。

こんな感じでやっていこうとおもいます。

それと、森での拾い物は管輅じゃありませんから。

次は森での拾い物をし、水鏡先生の所に行くつもりです。

四（前書き）

同じく文才がありません。
ごめんなさい。

四

どうも、北郷一刀です。

突然ですが、野良犬や野良猫になつたことつてありますか？
オレは何回かあったのでたまに寄ってくる犬猫を撫でたりします。
でも、それが猪とか狼だったり、肉食動物だったら怖いですよ？
さて、何が言いたいかと思うのでしようが早い話。
森で動物に会いました。

これが管輅さんの言つた拾い物なのかなと思います？

ところで、歌で。

ある日、森の中、熊さんに、出会つた。

って、言うのがありますけど。

今、オレはその状況に懂れています。

熊なんて、オレが対峙している動物とも言い難い生物と比べると可愛いでは足りない感じがいたします。

「管輅さんよ。森の中で拾い物って普通、馬とかじゃね？」

はい、申し上げます。

今現在、オレと対峙している生物は。

イナズマ型の角を持ち、白銀の毛を持ち、見た目的には馬？に近い生物です。

「動物じゃないよね？幻獣もしくは幻想種って言うんだよね。こういうの」

この幻獣の蒼い目がオレを捕らえた。

怖い、洒落にならんぐらい怖い。

見た目的には馬って言つたけど。

大きさは3メートル近くあるね、絶対。

落ち着け、落ち着け、オレ。

爺さんはともかく、師匠はこういうのに詳しいはずだ。

確か・・・・・・・・

「あ？幻獣もしくは幻想種に会った時？休憩時間にいなくだらねえ事考えてねえでよ、魔法の1つでも覚えてきたらどうなんだ？まあ、会ったら・・・・・・・・」

ギターケースを蹴り4段目に入れた大剣を取り出し

「全力戦闘っ！」

ちなみにこの大剣が一番重い。

更に言うと、このギターケース。

一刀の身長より少し大きいのだ。

なので、いつもやや高めに持っていたりするので教室の扉に挟まったり、色々な所で挟まるのだ。

大剣の一撃も幻獣の角によって止められた。

「ったくよ、何が拾い物だ！」

弾き飛ばし距離を取る。

「グオオオオオオオッ！」

咆哮が響く。

「おいおい、もうお怒りかよ。モンハンの敵でも簡単には怒んないぞ」

プレイ時間52時間のハンターの意見でした。

そんな軽口を叩いていると、頬を細い雷が貫いた。

当たりどころが悪かったらしく血がかなり出た。

「しかも、雷を操る幻獣かよ」

大剣を構え距離を取る。

魔法があるじゃん。魔法を使おう。

とは、思ったが。

「オレ・・・・・・・・初期の魔法すらまともに使えた事ないんだっ
た・・・・・・・・」

そう、北郷一刀には魔法の才能が皆無に等しいのだ。

威力が高く当たりさえすれば竜種を初期魔法で倒せるのだが。

一刀の魔法命中率は0・001%未満という状態なのだ。

目の前に撃ったはずなのに後ろに、なら後ろを向いて撃てば右側にと止まっている敵にすら当てる事が困難なのだ。

ただ、1つ得意だけ一刀が使える魔法がある。

強化魔法だ、その対象は自分の体と自分が持つ武器に適用される。

一刀は近距離型なので、これだけでいいや。と諦めがち。

「こうなったら、力押しだ！」

大剣を急所と思える場所に向かい振るう。

しかし、避けられ。

また、振るう。

それも、避けられ。

まだまだ、振るう。

全て避けられるが、それでも振るう。

終焉は夜が明けた時だった。

幻獣が疲れ始め、一刀はまだ余裕の状況だった。

※一刀の体力>幻獣の体力Ⅱ現状

現状で分かるが、一刀の方が大きく体力とスタミナで上回っているのだ。

この時、幻獣は思った。

「(我ら幻想種を超える体力を持つなど人間なのか!?この少年は!!!!)」

一刀はRPGであらわすと・・・普通の人の体力より10倍超ぐらいです。

「どうした、幻獣!もう疲れたか!？」

「(お主は何故、疲れん!!!)」

そこで一瞬の隙ができた幻獣にとどめと言わんばかりに大きく大剣を振りかぶり。

「一刀・・・・十六夜ノ太刀!」

瞬時に十六連の斬撃を叩き込む。

最後の一太刀で相手を吹き飛ばす。

ちなみにこれを対人で使うと、内臓や骨が切り裂いた皮膚から飛び出すと言うグロデスクな状況を作り出してしまう技でもある。

「どうだっ！これで、オレの勝・・・それ、アリ？」

体中に痛々しく残った斬撃の痕が癒えていく。

「（幻想種の持つ回復の力をなめて貰っては困る・・・だが、さすがにもう体力は残っていない。だが、わが誇りに賭けて退く事など、できん！）」

「え、まだやるのか？」

全力で走りながら突っ込んできた幻獣に、一刀は体中の魔力を強化にまわし大剣を盾にし。

「きやがれっ！」

だが、幻獣は大剣の数センチ手前で止まり、頭を差し出すようにして。

「貴方様こそ、わが主に相応しい。どうか、我が主となってはくれないか？」

つと、いきなりおっしやった。

「そうそう、一刀。幻獣や幻想種の大半って人間と話をするぞ」

その言葉を思い出すのは後の話。

「なっ、げ、幻獣が喋った！」

「今までの無礼をお許しください。しかし、これは主を選ぶ大事な・・・」

一刀がいきなり倒れた。

「どうしました！まさか、深手を負わせてしまいましたか！」

気絶した理由は、幻獣が喋った事で驚き、更に気が抜けてしまった十日が高いうちから夜が明けるまでのぶっ通し戦闘Ⅱ寝るっ！

幻獣もそれで、気が抜けたようで一刀の枕代わりになり眠った。

これは後に噂になり

『幻獣と戯れる少年』

と、言う噂が幽州に広まる。

「……………あ。寝てた……………そうだ、森抜けた先にある村に行くんだった」

「了解いたしました。では、お乗りください!」

「おおっ、サンキュー……………っておい。何で普通にいるんだよ」

「言ったはずです。貴方様をご主人に決めたと。ではでは、さっそくこれを……………」

テンションが低いままの一刀にも動じず、自分のペースでやる幻獣だった。

幻獣がどこからともなく風呂敷を取り出し、開く。

「これは……………何だ?」

「主殿は荷物を持っているでしょう?それは私に荷物をくくりつけるための道具です」

幻獣がどこからともなく取り出した道具に始めて見るものに関心を向けながら。

「んじゃ、これは?」

「鞍です。馬などにも乗るときに使われます。それを使った方が体への負担は少ないですよ」

「(確かに馬に乗った事ないしな) そうか、それじゃ、森を抜けた先にある村に行くか」

「了解いたしました。では鞍を付けて、荷物を取り付ける道具したら私に話しかけてください」

「いや、ゲームじゃないんだから。そんなのいらねえだろ?」

「いえ、安全確認です。主殿、交通安全を心がけないと飛び出して

きた子供をひくかも知れませんが。そんなのでは、車の免許がとれませんよ」

「……………管輅といい、こいつといい。オレの世界の常識が通るんだ？」

車って確か……………西部の開拓時代じゃなかったっけ？

「準備できたぜ。行ってくれるか？」

「了解いたしました」

そして、コレも噂になるが。

走るこの幻獣の姿。後に『シン』と名付けなれる一刀の愛馬（？）の走る姿を見た人は

『荒野を走る光』という噂を生んでしまうのだが、それは誰も知らない。

数日が過ぎても、まだ一刀はシンに慣れないでいた。

「ちよっ、速過ぎるって。シン！速すぎるだろ、これ！」

「大丈夫です、主殿。軍隊にはぶつかっても民の方たちにはぶつからないように心がけていますから」

「軍隊に怨みでもあるのか？」

「いいえ、まさか私が怨みなど……………あの罰当たり共め。

次に会うときは生かさん」

「……………（こいつも、存外に黒いな）」

そんな事を思っている一刀とは異なりシンは

「主殿、その村に何か御用事が？」

いつものようにしていた。

「ん、ああ。ちよっと、悩んでる事があってなその村で私塾をやっ

てる水鏡先生に会って見たら良いって言われたんだよ」

「言われた？・・・誰にです？」

「管輅って占い師だ」

「・・・ああ」

面識があるらしく、思い出したような仕草をし

「あの身体成長は絶望的なくせに精神年齢だけが高い、あの小娘ですか・・・」

「・・・本人がいないにしても、もうちょっとぐらひはフォローをいれてやろうよ。さすがに可哀想すぎる」

「しかし、目も当てられぬほど悲惨ではないですか」

一刀は思い出す。

管輅のスタイルを・・・バスト ウェストヒップB、W、H。

「ご愁傷様と言ったほうがいいのだろうか？」

「はい、主殿。それが最も正しいか、と」

酷いことを躊躇いも無く言う2人(?)だった。

「主殿」

「今度は何？」

「何やら良からぬ輩も同じ村を目指しているようです」

一刀が目を向けると、そこは荒野に黄色の旗が広がっていた。

私塾

いつも通りに授業をしようと思いやって来た水鏡は驚いた。

教室には2人しかいないのだ。

いつもなら十数人いるのだが、今教室には2人しかいないのだ。

「朱里、雛里。今日、他の皆はどうかしたのですか？」

「水鏡先生。えっと、皆・・・その・・・」

「皆、さっきまでは居たんですけど・・・」

歯切れが悪い2人に、水鏡は少し心配になり。

「まさか、賊……ですか？」

「ち、違います。えっと、その……えっと、えっと……」

朱里の頭から煙が上がり始め。

「しゅ、朱里ちゃん。お、落ち着いて……」

「朱里、落ち着いてください（朱里がここまで慌てるとは……一体、何が？）」

更に心配になっていく水鏡の様子に気付き、更に朱里と雛里が焦り。

「はわわわわ」

「あわわわわ」

最終的に煙を上げた2人を見るしかない状況になり、立ち尽くしていた。

「動くな」

突然水鏡の肩を掴み、短刀を首に突きつけ肩を掴んだ人物がそう言った。

「お前が水鏡だな」

「……はい」

後ろを下手に見ることができず、思考をめぐらす。

「は、はわわわわわ」

「あわわわわわ」

更に追い詰められた生徒たちの方が心配になり、思考が止まる。だが「くくく、街の奴らが見せ物に集まってるおけがで楽に進入させてもらったぜ」

低い笑い声をあげた後、そう言った。

「何者ですか？」

「黄巾党って言えばわかるよな？」

「っ！黄巾党が私に何のようですか」

「んなもん、決まってんだろ。あんたの知識をおれ達のために役立ててほしいんだよ」

「断る、と言ったら？」

「あんたとそのガキを殺すんだよ」

下卑た笑みを浮かべる、男に何もできない自分に憤りを感じ唇を強く噛み。

「くっ・・・・・・・・」

「へへ・・・・・・・・さあ、答え・・・・・・・・ひっ！」

肩を掴む感覚と短刀が突然消えた。

後ろを振り向くと

「な、何なんだよ！お前は！？」

黒い服を纏った少年が、さっきまで自分に脅迫していた男をの首を絞め。

「私塾をやってる水鏡って人に用があって来た旅人その1だ」

「はあ、何ふざけて・・・・・・・・！」

思いつきり床に叩きつけ

「寝てろや」

無表情で、言い捨て。

水鏡と向き合い。

「オレは、あんたに用事があって来たんだ。とりあえず、それを・・・・・・・・」

言いかけた時、男が意識を取り戻し立ち上がろうとして。

「話の最中だ」

足で頭を踏みつけまた気絶させる。

「とりあえず、相談。人生相談みたいな事をしてもらおうって思っ
て来たんだ」

「人生、相談ですか・・・・・・・・？」

「そうそう」

頷きながら答えを求める一刀。

まあ、『はい』しか答えとして認めないだろうが。

これが、水鏡、朱里、雛里との出会いだった。

四（後書き）

一刀、水鏡と朱里と雛里が出会う事。

これが、今回のまとめなのですが。

もう少し、カッコいい助け方だったほうが良いですよね。

朱里と雛里はわけが分からないまま、置いていかれてますし。
まあ、大丈夫だろうと勝手に思い込みます。

では、また。

五（前書き）

おなじみ文才がないです。

でも、頑張って更新するのでよろしくお願いします。

五

オレは、水鏡に客間に案内された。

「私はこの男を、一応役人に突き出しておきますので少しお待ちいただけますか？」

「おう、構わないぜ」

それで待たされる事になったのだが

「はわわわ」

「あわわわ」

何だ？この小動物は？

「あー、オレは北郷一刀。あんたらは？」

「え、えと。諸葛亮っていいまひゅ！」

「あわわわ、えと、えとえと。鳳統でしゅ！」

自己紹介の時に噛むのって恥かしいものがあるよな。

まあ、あえては指摘してやるまい。

「オレは旅人でな、この国の事は言葉以外分らないんだ？教えてくれないか？」

「は、はい。任せてください！」

諸葛亮にこの国について教えてもらった。

「つまり、今は王様が不安定な状態でさっきの奴。黄巾党の野郎共が好き勝手に暴れまわってるわけか？」

不安定ならさすがに他の事に集中する暇はないってか。

「はい、この街は比較的被害は少ない方なんですけど……」
俯いたまま、オレに話しかける。

「北郷さんは、どこかで将をやっていたんですか？」

「いや、別にそういうわけじゃないな」

事実オレが、常人の域を超えているのは爺さんと師匠のおかげなのである。

師匠に会って

「お前には魔法の才能がある」

とかつて、言われたのが始まりだったわけ。

まあ、実際は初期魔法1つまともに使えないわけだったが。

「2人が私塾に通っているのは、やっぱり仕事に就くためか？」

「はい。ですけど、私たちは多くの人々の役に立ちたいんです」

「役に立つ？」

「私達にも、今の世で多くの人々の助けになることがあるはずなんです」

「成程な。頑張れよ」

「はい、ありがとうございます！」

元氣なんだな。

オレにも、この位元氣があっただけ……。

「お待たせしました」

水鏡が入ってきた。

「いやいや、押しかけたのはオレ何だ。会ってくれるだけでもありがたい」

オレの正面に座り。

「それで、人生相談っと言うのは？」

「まあ、それもあるが……。1つ聞いていいか？」

「はい、私の答えられる範囲であるなら何でも」

「水鏡さん。今の世についてどう思う？」

「今の世ですか……。王が安定していない、現状を考えますと……。いずれ、この大陸を分断する国に分かれ大きな戦をし始めるかもしれませんね……。」

でかい戦……か。

「あなたは、どこかの国に所属しようと考えているのですか？」

「・・・・・・・・何でだ？」

「貴方は、あの男を捕らえた時の動きは洗礼されていました。その気になれば殺せるほどに」

「・・・・・・・・ああ」

「貴方は、人を殺した事がありますね・・・・・・・・」

「・・・・・・・・ああ」

オレは、懺悔するように目を閉じた。

始めて人を殺したのは、中学の修学旅行のバスの中でだった。

オレの組のバスはバスジャックされた。

1人がナイフ、1人が拳銃を持っていた。

怖かった。

自分が殺される事も怖い、けれど目の前で他人が死ぬほうが怖かった。

だから、オレは拳銃の方に突っ込み拳銃を奪った。

もう1人がオレを殺そうとナイフを向けて突っ込んできた。

オレは、撃った。

心臓部に一撃。

勿論、即死だった。

そこから、オレは周りに避けられてずっと1人だった。

それが嫌になり、オレは逃げ出した。

オレは爺さんの家から近いフラチエスカ学園に転校した。

中学は寮制度だったので、爺さんの家から遠い。

だから、誰もオレの事を知らない。

そのおかげでオレを仲間に誘ってくれた友達がいた。

友達がいなかったらオレは今よりも捻くれてたかもしれない。

殺す事は怖い、殺されるのも怖い。

守れない事は嫌だ。

自分が無力で誰も助けられないのもいやだ。

だから、力を求めた。

どんな化け物になろうと守るための力を得た。

けれど、オレは多くの命を奪った。

オレと何の関係のない人たちのために、オレは研究者を殺した。その研究の産物である人間だったものも殺した。

オレはただの殺すだけの存在なのかもしれない。

そう思う事が多々あった。

「オレは、決めたんだ。殺してきた奴らの分まで生きるって。どんなに格好悪かろうと、泥を被ろうとも絶対に生きるって。この考えってやっぱり変か・・・?」

「いえ、私は良い。と思いますよ」

「理想って追いつけるものなのか？」

「・・・・・・少なくとも1人では無理です。多くの人々の助け、支えがあつてようやく理想というものが成るものです」

「・・・・・・」

「・・・・・・」

沈黙が続く。

「なあ？」

「はい、何でしょう」

「罪って許されるものなのか？」

「それは分かりかねます。その答えは貴方しか見つけられないではないかと思います」

水鏡がオレに向かって笑顔を向けてくれた。

それは安心できた。

自分でも分からないが安心できた。

思い出せば、後悔ばかりだった気がする。

多くの人を守るために片っ端から敵と戦い続けた。

何が敵なのか？何があって敵なのか？自分では分からない事が多かった。

もし、自分が今までやってきた事が間違いならば殺してきた者たちはどうなる？

そう思えた。

「？・・・・・・・・あ・・・・・・・・」

目が覚めると、客間でオレは寝ていた。

疲れていたんだろうか？

・・・・・・・・それに答えはまだ、分からない。

何が正しいなんかわからない。

なら、探しに行けばいい。

あの女（劉備「真名・桃香」）と次に会うときに・・・・・・・・

「おや、目が覚めるましたか？」

混乱していた頭がその声で正常に戻った。

「おう、悪いな。寝ちまって」

「いえ、きつと疲れが溜まっていたのでしょう。異世界から来たばかりでなれていないのでしょうかね」

「！・・・・・・・・何でそれを？」

「私のところにも来たんですよ。あの占い師が」
「・・・・・・・・」

なんか、はめられた気分だ。

五（後書き）

最初に書いていた「五」がパソコンの不備で消えてしまいました。急いでつくり直したのですが、なんか適当になってしまいました。

六（前書き）

御なじみ文才がないです。
でも、がんばります！

六

とりあえず、情報を集めるために各地を旅しようとオレは考えた。そのためにはまず金がいる。

移動手段は「シン」がいるから大丈夫だろ。

食料は、長期保存が利くものもいいよな。

どのみちこの村で仕事をしながら準備するしかないのだ。

ギターケースや旅行用のカバンの中の物を売ってもいいが・・・個人の物が多いのでさすがに・・・無理。

「あっ、最初に考えるのは宿だ。短期とはいえ住む場所がなかったらいけないよな」

水鏡の家の客間で寝て1日はなんとかあった。それ以降が問題だ。

シンは、街の外で適当に待っているとは言ってたから大丈夫だよな、多分。

「いっそ、野宿でもいいかな・・・」

「ダメです」

「・・・いつの間にか隣にいた、水鏡先生にあっさり否定された僕がいました。」

「いや、ダメって・・・金が無いから宿には止まれないんだよ」

「大丈夫ですよ」

「いや、根拠は？」

「この部屋を貸しますから」

「・・・誰に？」

「あなたに決まってるじゃないですか」

「いやいや、それは迷惑がかかるだろう。水鏡さん、あんた・・・オレ、男だぜ？」

「いえいえ、これと言って好きな殿方はいませんでしたし丁度いいかな、と」

「・・・今、何を考えた？」

「若い夫との新婚生活・・・ですかね」

「そうかい、あんたならいい人が見つかるよ」

「・・・・・・・・」

睨まりました、それはもうかなり。

水鏡って若いね、迷ってる事を相談したほうが良いって言うから結構な高齢の方だと思ってたけど・・・・若い。20代前半？

「そ、それじゃあ。朝飯ぐらいは作らせてもらうわ」

この人には会話じゃ勝てない。

「はい、お願いします。旦那様」

無視だ。オレ、無視をし続ける！

んで、仕事は狩りにしました。

日本刀と蒼紅一对の双剣。

猪が洒落にならないぐらい大きかった。

現代のは小さいほうなんだ。そう思わされた。

狩りの仕事の次は、飯屋。

「新入り！これ、向こうの机に頼むぞ！」

「はいっ！」

「店員さん、水のおかわり」

「ただいま！」

「ごちそうさま。店員さん、会計頼むよー」

「はい、すぐに行きます」

・・・・・・

・・・・・・

・・・・

「いやー、店長。今日は結構お客さん入りましたねー」

「そうだな、それに対応できたのも新入りのおかげだ。ありがとよ

！」

「は、はい……」

店長はテンションが以上に高い人だった。
やや気圧される事が多々ある。

「修行以外で褒められるのは初めてだな……」

「あ、北郷さん！」

「よう、諸葛亮。私塾が終わったのか？」

「はい、北郷さんもお仕事が終わったんですね」

「おうよ、久々にやりがいのある仕事だったからね」

「……すごいんですね。私なんて全然体力ないですよ……」

「いいんじゃないか？その分、知識に長けているんだ。得意、不得意があるもんだろ」

「そう、ですよ。ありがとうございます。うじうじ考えるところでした」

苦笑いしながら言う諸葛亮に

「よっ」

諸葛亮の額に、親指で中指をはじく。
でこぴんをした。

「はわわ!？」

「んじゃ、うじうじ考える度にオレが今みたいにしてやろうか？」

「だ、大丈夫ですから。でこぴんはいいですよー」

「んー、じゃあ。こっち？」

頭を撫でる。

「……ぽー……」

ノーリアクション？いや、顔が緩んでる。

「気持ちいいですか？」

「・・・ぽー・・・」

「お客さん、頭撫でられるの好き？」

「・・・気持ちいいですー」

「そうかい、そんじゃサービスと」

頭をわしゃわしゃと撫でる。

「はわわ！？な、何です？」

「いや、可愛いなって思っただけだよ」

いかん、オレの方が癒されてる。

あ、でも癒されてるのも久しぶりだよなー。

ん、視線？街の人、じゃないな。

鳳統と、もう1人。

身長は諸葛亮や鳳統より大きい。

うん、立派なスタイルだ。

「よお、どうした。鳳統」

「い、いいえ。何でもないでひゅ・・・あう」

噛んだな・・・もっとゆっくり喋ればいいのに。

まあ、遅すぎたらオレも怒るだろうけど。

「あなたが、水鏡先生のご友人の旅人の方ですか？」

もう1人の女の子が話をかけてきた。

「（友人？まあ、いいか）そうそう、北郷一刀ってんだ。今は金が

無くてなこの村に滞在してんだ」

足元から頭まで見て。

「この国の方じゃないんですね」

「ああ、そのおかげでこの辺りの事はまったく知らないんだ。諸葛

亮と鳳統に少しは教えて貰ったが、まだまだ知らない事だらけだよ」

「・・・そうなんですか？」

「そうなんですよ」

オレは苦笑いしつつ、会話を終了させ。

「塾終わったんならまっすぐ帰れよ。オレみたいな悪い男にちよっかい出される前に」

「北郷さんなら・・・・・・・・」

「鳳統さん？」

何か、今・・・・・・・・いやいや、相手は年下だぞ。

これは、アレだ！年上をからかう時の冗談って奴だ。

そうだ、冷静になれ、冷静になるんだ！

「さて、オレもどっかで飯でも食いに・・・・・・・・」

「あっ、なら。ご一緒しませんか？」

諸葛亮！出来れば、喋らないでくれ！

表情には出してないけど、精神内ではものすごい葛藤が起こっているんだから！

しかし、断る事ができないオレであった。

「へー勉強仲間でもあるし、菓子作りの仲間でもあるんだ」

「はい、元直ちゃんほどは美味しくできないんですけどね」

諸葛亮が苦笑いしながら言った。

「いやいやー、得意不得意がなかったら凄いつて。抜け目のない天才でも実は、どこか弱点とかあるもんだし」

「北郷さんも旅の途中でそのような人と会ったのですか？」

元直が聞いてきた。

「ああ、かなりいたな・・・・・・・・曲の演奏は上手いんだが日ごとに付き合う女性が違う奴とか（及川）、周りに人気があるんだが笑顔で人を殴る奴とか（バンド仲間）、勉強や運動はできるんだが見ただけが怖い理由の人とか（バンド仲間）、色々いたな」

「最後の人だけは同情できますね」

「オレもそう思う」

「あ、あー・・・・・・・・」

「そう言えば、北郷さんって演奏とかできるんですか？」

諸葛亮が興味を持ちオレを見てきた。

「おう、何で知ってんだ？」

「だって、北郷さんのカバンって琵琶の形をしますよね！」
正確には琵琶じゃない。

まあ、ギターケースもあの大きさになると、怪しいが。

「あ、あーん」

「ん？」

気がつくのと、オレの隣に座っていた鳳統がオレの口の前に箸で料理を向けていた。

「オレ？」

「コクコク・・・・・・」

「んじゃ、ありがたくっ」と

口に含む、この料理はなんと言うか・・・・・・上手いんだが、何か物足りない。

「・・・・・・じー」

「美味しいよ、ありがとな。鳳統」
頭を撫でると、顔を俯かせた。

「「じー」」

何か、めっちゃ見てきてる。

オレの前に座っている2人が、鳳統じゃなくてオレを！

「「じー」」

何、オレなんかやった！？

「あの諸葛亮、元直。何で見てくるんだ？」

「何でもないですよ？」

「お気になさらず」

何か視線が冷たい。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「あー、何だ。その、諸葛亮さん、元直さん。これは？」
2人が無言でオレの前に箸を突き出していた。

「いえ、それよりも食べてください。北郷さん」

「そうですよ、さあ、召し上がってください。北郷さん
怖い、何か怖い。」

冷や汗物だった。

元直の方のを食べると、諸葛亮だけでなく鳳統からも刺さる視線を
向けられた。

諸葛亮のを食べると、元直と鳳統からも。

また箸を向けていた鳳統のを食べると・・・・・・・・以下、当分ル
プ。

「あんな、オレを太らせる気か？」

「だ、大丈夫ですよ！北郷さんなら筋肉の方にまわりますよ！」

「オレ、実を言うとそんな筋肉ついてないぞ？」

腕を出すと3人が触り始める。

「あつ、本当だ。やわらかいです・・・・・・・・」

「でも、無駄なお肉でもないです・・・・・・・・」

「硬すぎず、やわらか過ぎない・・・・・・・・女性にとっては理想的
だと思いますよ？」

「そう、なのか？」

「はい。事実、私も・・・・・・・・。いえ、何でもないです！」

「？」

「皆！避難しろ！」

突然、警鐘が鳴り響いた。

「黄巾党だ！黄巾党が来たぞ！」

声が響いた。

その直後、街が混乱に陥った。

「おいおい、どうすんだよ？」

「大丈夫です！この街は大きな壁に囲まれていますから。入るのは簡
単じゃないんです！」

それって、逃げるも難しいんだよな。

「分かった。お前らは避難してろよ」

「北郷さんは！」

「オレは元々、剣士だぜ？任せとけ！」

「え、1人じゃ……」

声の途中で走り出し、大剣を取りに戻り街を囲う壁に向かう。

「おっさん、どんな状況だ？」

見張りをしている警備兵に声をかける。

「問題なし、と言いたい所だが、奴ら数で攻めようとして来てるんだ！」

「なるほど、じゃ。行ってきます！」

壁を黄巾党のいる方に飛び降る。

「お、おい小僧！」

「着地、成功したな」

大剣を構える。

「ざっと、1万ちよいか……」

全員の視線がオレに向けられる。

「ま、死なないだろ（多分）」

体中に魔力を巡らせ。

「てめえら、黄巾党はこのオレ様が相手になってやる！かかってきやがれ、雑魚共！」

挑発にのり、一斉に襲い掛かってくる。

六（後書き）

次回、一刀君VS1万の黄巾党。
今、思ったけどここで死んで生き返る時に覚醒ってのも良いかもしれないって思った自分がいた。

七（前書き）

ぶんさいがないです。

なので、大抵は多めにみてくれると助かります。

七

オレの目の前には1万の黄巾党の兵。

数が多い、しかも狙いをオレに変えてきてやがる。

大剣のマイナスは隙が多い、重いなどがある。

が、隙が多いは最低限の振りで済ませばいいが重いので無理。

結論

「自棄しか、ないな………はあ」

大剣で向かってくる黄巾党たちを迎え撃つ。

目の前の男は、挑発してきやがった。

たった1人なのだ、すぐに終わる。そう思っていたが………

「に、逃げろ！」

「おれ達じゃ、敵わねえ！」

「こ、こ、殺される！」

なのにこの男は一步も退かない。

おれ達は散り散りになってしまった。それが、まずかった。

「ったくよ、散り散りになりやがって………まあ、いいか。消えろ！」

奴は大剣を力任せに振り下ろしたただだった。

振り下ろされた地面から、閃光が走り何人かに当たる。

それがさらに拡散し、命を奪う。

「な、何なんだよ！あいつは！」

「しょ、衝撃波が分かれたぞ！」

逃げ出せば拡散する閃光、向かって行けば迎撃。

「くそっ！てめえら、逃げるな！全員で数を押せば勝てるぞ！」

その声が響き一斉にあの男に向かう。

「くそっ！てめえら、逃げるな！全員で数を押せば勝てるぞ！」
数で押せば、ね。

随分、楽な相手のように見てるな。

「北郷の剣術、その目に焼き付けるんだな」

北郷の剣術は本来は対人のもの。

しかし、その後の氣やら魔力の影響で複数の派生が生まれた。

対人、対軍、対国、さらには対神。

神をも殺す剣術を作り出した先代もいた。

その中でも、父さんは歴代最強と呼ばれていた。

なのに、何故だ？何故、火事ごときで死んだ？

起きられなかった？そんなはずはない、最強の剣士である限りその線は否定できる。

「……いや、それはいいか。」

今は、こいつらだ。どうやって、こいつらを倒す、もしくは追い返すかだ。

「……………」

大剣で空をさすように向けて。

「波高衝！」

さっきと同じ拡散する閃光だ。

これは、魔力消費のわりには威力がいい。

地面を走りながら大気中のマナを食い散らかしながら進むので効率がいいのだ、しかし。

「はっ！」

自分に向かってきた、衝撃波を斬撃で吹き飛ばす。

敵を追うあまりに、オレの方に突っ込んできた敵を追ってオレの方に帰ってくる事がある。

とりあえず、5千は切ったことだし。

「空燕」

元々は三日月の形をした衝撃波を連続で放つのだ。

しかし、オレにはまだ扱えていないため二連が限界だ。

「うん。とりあえず、近づかせない」

波高衝と空燕を交互に近い、敵を近づかせないようにする。

「な、何なんだよ。あいつは！」

「人間じゃねえ！」

おれ達はあの男の強さに圧倒されていた。

近づく事さえできずに、倒されるのだ。

仲間がごとく殺されていく。

腕を切り落とされた奴もいれば、足を切られて動けない奴もいる。

ひどい奴は内臓をばら撒き死んだ奴も少なくない。

「くそっ、これじゃてんぼーちゃん達に何も……」

朝日が昇ってくる。

「何なんだよ！ たった1人に何やってる！」

「うるせえ、こんな化け物相手に突破なんてできるか！」

「このままだと、呂布と戦った奴らみたいになっちまうぞ！」

この前、同じ黄巾の奴らが呂布と戦ったようだが全滅させられたようだった。

3万相手にたった1人で全滅させた呂布。いや、それより上の存在だ。

「殺せ！ とりあえずそいつを殺せ！」

「殺せ！」

「殺せ！」

「殺せ！」

やれやれ、殺せ殺せと。

うるさい奴らだ。

魔法が扱えれば楽勝なんだろうが、生憎とオレには命中率が一桁にも満たないものだ。

「そーいや、波高衝は魔力を刃に集中させるんだよね？ だったら、ただ大剣に纏って振り下ろしたら……………」

オレはバカなので、思ったらすぐ行動。

大剣に大量の魔力を纏い、振り下ろす！

瞬間、オレの目の前の景色は白くなった。

「はわわわ！」

私達が壁の上から北郷さんを見ると、一瞬だけ光り爆発した。

「朱里ちゃん！ アレ！」

雛里ちゃんが指差したのは、光りを放った中心。

大穴ができていました。

「い、行こう！ 雛里ちゃん！」

「う、うん！」

私は2人が行くのを見送って。

「先生、行くべきでしょうか？」

「……………元直、彼はもしかしたら本当に……………」

「……………水鏡先生？」

水鏡先生は何か思いつめた表情をしていた。

あの2人では北郷さんを運ぶのは無理そうなので急いで追うことにした。

ただ、水鏡先生のあの表情が気になった。

「北郷さん！北郷さん！」

「ど、どうしよう。起きないよ………」

私達は北郷さんを見つけた。

しかし、大穴の真ん中でうつ伏せで倒れていて私達は非力で顔を上に向ける事もできない。

「と、とりあえずは息はしてるから目覚めるよ！」

「そう、だよ。早く北郷さんを運ぼう！」

しかし、彼女らが2人でも一刀を運ぶのは無理に等しかった。

別に強くなりたくはなかった。

オレが望んだのは、ただの平凡な日常。

朝、母さんに起こされて父さんと朝食を食べて母さんに急かされて登校したり。

学校で騒いだり、街で遊んだり、そんなどこにでもある日常が欲しかった。

だから、学校で仲間とバカやって怒られて、そんな学校生活だけでもいいから送りたいかった。

それでも、自分の罪は消えない。

それは知っている。

自分の罪からは逃げない。

罪と向き合わなければ、オレはオレでなくなる。

罪から逃げたら、今までの自分が強くなりたかった自分が嘘になるから。

「……」

医者が水鏡と向き合っている。

「彼の容態はどうですか？」

「……何とも言いがたいのですが……」

「はい」

水鏡の隣では諸葛亮、鳳統、元直が心配そうに一刀を見ていた。

「……その、傷の治りが異常に速いのです」

「傷の？」

「はい、普通なら1週間かかる傷をわずか1時間足らずで治っています」

「その理由は分かりますか？」

「さすがに、分かりかねますが。これは恐らく細胞の関係だと思うのです」

「細胞ですか……？」

「はい、数は少ないですが前例があります。普通とはかけ離れた細胞。その影響で傷の治りが速くなったり、異常な力を持ったりなどの前例があります」

険しそうな表情で言う。

「あ、あの。前例と言うのは？」

元直が心配そうに聞く。

「……元々は妖術師が使っていたものらしいのだ」

「妖術師……！」

元直が反応する。

「ええ、しかし……妖術師に近い。それだけで、妖術師とは異なります」

「異なるんですか？」

水鏡が冷静に問う。

「はい、本来の妖術師は意思、自我が無いに等しいのですが彼は違う。そうすると、彼は近い何か。と、言う事になります」

「近い、何か……」

七（後書き）

今回出てきた、細胞と言うのは一刀の使う魔法という力に関係してきます。

八（前書き）

久々の更新のような感覚です。
とりあえず、がんばりたいと思います。

八

．．．．．起きろ．．．．．

誰だ？

オレはお前だよ。

？ 意味が分からない。

言葉通りさ。オレはお前。お前はオレ。まったく同じ存在さ。

それで、オレに何か用か？

いや、ただ久しぶりじゃないか？

何がだ？

こうやって暖かくなる感覚、辛い事も嫌なこともなにもない。この夢心地。

そうだな。

あの時、以来だな．．．．．。

あの時？

突然、眩しいほどの光が放たれた。

「っ！」

起きれば、布団の中でオレは眠っていたようだった。体にはいくつかの包帯。

記憶を巡る。

「オレは黄巾党と戦って……どうなった？」

とりあえず、外は日常を象徴するように市の喧騒、子供の声が聞こえる。

「黄巾党は追い払えたみたいだな……」

体を起こし、軽く運動をする。

頭が少し痛い、体全体がだるい。

服装は病人みたいな感じだった。

「着替えは……」

ケースにしまった予備の服を探す。

「予備、どこにしまったっけ？……あれ？何で学校の制服が……？」

少し考え思い出したように言った。

「そっか、父さんと母さんに見せようと思ったんだっけ」

顔を手で伏せ。

父さん、母さん。ごめん、少し顔合わせは遅くなるみたいだ。

ちなみに言うと、予備の服は

フランチェスカの制服、私服×5（全部黒）、スーツ。

あれ？スーツ。何故に？

考えるのもめんどくさくなり、私服に着替えた。

街に出ると、街の人たちが集まってきた。

「皆！お目覚めになられたぞ！」

「おおっ！天界の遣い殿だ！」

「皆、速く集まれ！目が覚めたみたいだぞ！」

何か、人気のある人みたいになってる。

「え？何、どういう事？」

人混みの中から水鏡がオレの隣に来て。

「貴方が来る数日前に占い師が来たのですよ」

「占い師？」

「はい、その方が『この街は、黄巾党に襲われるが天界からの旅人がこの街を守るだろう』と」

「それが、オレって事？」

「おそらく、貴方の自覚あるなしに関わらず街の皆は貴方を称えるでしょう」

「そっか・・・ま、悪い気はしないな」

そこからはお祭り騒ぎだった。

まだ、10時頃だというのに、酒を飲み、ご馳走を食べ大騒ぎとなった。

オレが病み上がりなのは無視か？

最終的にこのお祭り騒ぎが収まったのは日付が変わったごろ。

「・・・この前まで、あいつらと当たり前みたいに騒いでたのにな」

このお祭り騒ぎを懐かしく感じてしまった。

ほんの少し前まで、騒ぎのある日常が当然だったのにな・・・。

池が月を映し出していた。

とても綺麗な光景が写るその場所に私は彼を呼び出した。

「待たせたか？」

「いいえ」

「そりゃ、良かった」

私の隣に座った。

「貴方はあとのくらいでこの街を離れるのですか？」

唐突の質問にもたいして驚かずに彼は答えた。

「明日あたりにでも出て行くつもりだよ。いつまでも黄巾党に怯えるなんて皆嫌だろうからな」

「つまり、貴方は黄巾党の首領に戦いを挑むつもりですか？」

「まあな、勝てなくはない。敵の首領を討ち取ってすぐ逃げれば問題なしだ」

彼は難しい事をことも無げに言う。

私はきつとそこに魅力を感じたのだと思う。

「お願いがあります」

「ああ、分かった。任せろ！」

「……まだ、何も言ってますんが？」

「オレは水鏡さんに何度も助けられたんだ。礼に出来ることはやらせてもらうさ」

「そうですか。では、朱里と雛里。あの2人も一緒に連れて行ってほしいんです」

「諸葛亮と鳳統を？」

「はい、あの2人はまだ世間を知っていません。彼女らは遠くない未来に私を超えるでしょう。だから、そのためにも本で知るよりも自分達の目で見てもらいたいのです。戦も暴政をする悪人もそれに對抗する人々や苦しむ人々を知り、多くを救える人になってほしいのです」

「なるほどね。でもさ、オレが行くのは戦場のど真ん中だ。だから、それは無理だ」

「そうですか……」

私が俯いて少し、時間が経ったあたりで。

「でも、いい勉強になる人の所なら知ってるからそこならどうだ？」

「……いいでしょう。あなたが言うのなら私にも信頼にたる人物なのだと思いますから」

水鏡は笑って言った。

「ちなみに、彼女らはもう準備していますけどね」

「まさか、最初はオレに無理矢理ついて行かせるつもりだった。何て言わないよな？」

「……ふふふ」

「そこ！笑うところじゃない！」

立ち上がり、寝るために布団のある部屋に向かう。

「北郷さん」

「何だ？」

「罪については良い考えが浮かびましたか？」

「……ああ、おかげでな」

「そうですか、それなら私からも1つ」

水鏡はオレに近づき。

「？」

オレを抱きしめた。

体が熱い、緊張がオレの体を支配した。

耳元で水鏡は言った。

「別に罪を犯したからといって、聖人のようになって償おうとすることはないんです。どんな罪を犯し背負おうとも貴方は貴方の思ったとおりの生き方をしてください」

体にその言葉が溶け込んでいった。

そして、気がついていなかった。

オレと水鏡を見る3人に。

「あ……あ！水鏡先生大胆ですう」

「北郷さん、大人の女性が好みなのかな……？」

「……」

元直がオレを穴が開くように見ていたそうだが気がつかなくて良かったと思う。

「私達、北郷さんとは旅が出来ないんだね……」

「うん……でも！きっと、迎えに来てくれるよ！」

「だよね、うん。その時は一緒に旅を……」

「あっ！」

元直が一刀と水鏡には聞こえない声で言った。

「ど、どうしたの元直ちゃ……………」

「……………あう……………」

深く考え事をしていたオレの記憶にはないがキスをしていたらしい。
惜しい事をした。

考え事をしていると、水鏡がオレの肩を叩き。

「落ち着いたら、また私の所を訪れてくださいね？」

「あ、ああ。けど、そこまで頼るのは……………」

「構いませんよ。前払い、終わりましたから」

前払い？さて、何をしたか……………黄巾党を追い払った事なのか？
というか、それしかない。

八（後書き）

水鏡と一刀の約束でした。

一刀はこの後、黄巾党との戦いに挑みます。
では、また。

九（前書き）

お馴染みに頑張ります。
とりあえず、頑張ります。

九

オレは日が出る前に起きて旅の支度を始めた。

「食料は問題ないな。洗濯は……川を見つけてからするか……」

荷物を背負い一刀は街の門を潜る。

「ま、機会さえあればまたくる事になるかな……」

何故か、離れがたい感覚があった。

これがかすると、故郷を離れて働く人の感覚なのかもしれないと思った。

門から少し離れた所で4人が待ち構えていた。

「待っていましたよ」

「そうかい、そんで2人には頼みたいんだが」

オレは諸葛亮と鳳統に視線を向ける。

「はい……」

「……（言えない。本当は昨日覗き見していた。なんて……」

・」

「オレはこれから戦場のど真ん中を旅するから2人は連れて行けない。分かるか？」

「……はい」

「分かって……います」

そう返してくれた。もうちょっと手こずるように思っていたんだけどな……。

まあ、これが覗き見していた罪悪感から簡単に答えてくれていたなんて知らなかったけどな。

「オレの知り合い、でも……ないな。まあ、森を抜けて少し行った街に多くの人を助けたいって思ってる奴がいる。そいつの手助けをしてやってくれ」

「……その人は、どういう人なんです？」

「さあな。オレも会ったばかりだ」

「無責任ですう……」

諸葛亮が頬を膨らませて拗ねる。

「ああ、全くだ」

撫でたくなる衝動を抑えつつ、笑顔で返す。

「北郷さんの事ですよ……」

鳳統のツツコミは無視だ。

「でも、とりあえず言えるのは。あのままだったら自分に負けて他人どころか自分すらも助けられなくなるだろうからな。それでも、救ってくれる奴がいるなら何度でも自分の理想に迎えるだろうからな」

「はう……」

「かつこいいですう」

まあ、これは持論だ。

あの子と出会って水鏡に会って、それから新しく考えたオレの考え。事実、今のバンド仲間がいたからオレはオレでいられるのだから。あいつらに話しかけられなかったら今頃どこかで壊れていただろうと思う。

「ふむ、森の先……確か劉備と言う方が仲間と共に黄巾党と戦っていたと言う話を聞きました」

「なるほどね、あいつは劉備っていうのか……」

荷物を背負い直して。

「それでも、2人じゃ危ないだろうから……」

「北郷さんが送ってくれるんですかつ!!」

諸葛亮が期待に満ちた目を向けるが。

「いや違う」

即否定。

「……」

何か、期待させといて何なんですか！みたいな目で見られてる。

「オレじゃなくてこっちだよ」

シンを指す。

「はわわわ」

「あわわわ」

「げ、幻獣っ!？」

「珍しいですね……」

諸葛亮たちとは裏腹に水鏡は落ち着いていた。

「乗り心地は保障する」

「人を襲ったりしないんですか？」

元直が心配そうにオレを見るが、笑顔を向け。

「こいつは草食だからな、こっちから怒らすような事をしない限り何もしないよ」

身長が足りなかったのでシンを座らせて、2人に乗るように促す。

「主、2人を送り届けた後はどうしたらいいでしょうか？」

「じゃ、喋りました!？」

諸葛亮がびびってる……。鳳統は……。小さくなってる。

「匂いか何かでオレを追ってくれ」

「……分かりました(難しい事を事もなげに言う人だ)」

シンが立ち上がる。

「そんじゃ、気をつけてな」

手を振り、見送る。

「ま、待ってください!」

が、諸葛亮が止める。

「何だ？」

「北郷さん、私の事。朱里って呼んでください!」

「あ……。私も雛里って呼んでくだひゃい!」

鳳統は囁んだようだ。

「それって特別な呼び方なのか？」

「あつ、天界には無かったんですか真名は？」

「『真名^{マナ}』って何だよ？」

「真名っと言うのは、その人の生き様を示す神聖な名です」

「そんな大層な物を許すなんていいのか？」

「はい！北郷さんなら、私の真名を預けられますから……」

「……（コクコク）」

鳳統も頷いてくれている。

「そっか、えっと……そんなじゃ、朱里、雛里！気をつけてな！」
笑顔で見送る。

「は、はい！」

「行ってきましたゆ！……あう」

最後の最後まで囁んだか……。

2人が見えなくなった後、水鏡がオレと向かい合い。

「旅をするならこれは必需品ですよ」

そう言って地図を渡してくれた。

いくつかの地域に分かれているようで、劉備のいた街と森、魏と呉？

「なあ、魏と呉って国か？」

「そうでしたね、あなたは知らないのですかね」

一度咳払いし。

「魏と言うのは曹猛徳が、呉は孫策が王の国で詳しくは見て回るといいですよ」

「百聞は一見にしかずって事か？」

「そういう事です」

笑顔で答えるが、実際は面倒なだけだったんだろ？などと後々思う。

「北郷さん」

今度は元直がオレと向かい合い。

「何だ？」

「北郷さんをお願いしたい事があるのです」

「お願い？」

「はい。もし、旅の道中で于吉という妖術師に会ったら。お願いです、必ず倒してください！」

「敵討ち、です。敵討ちに意味がないのは分かってます！けど、あの妖術師だけは！倒さないといけません。じゃないと、私みた

いに家族を失う人が！」

元直の頭つかみ、軽く抱きしめて。

「任せとけて、オレがそいつを倒してやるよ。約束する」
一刀は笑ってそう答えた。

「後、お守り……持って行ってください！」

「お、おう」

気迫にやや押されるが、受け取り。

「ここまでしてもらったんだ。約束、はたすからな」

その後、水鏡と元直に見送られ、適当な方向に歩き出した。
とりあえず、森以外の道を目指し歩き始めた。

「そう言えば、お守りって……」

中身は分らないが、とりあえず首にかけるものらしい。
手触りでは石？のようなものだ。

歩いたり走ったりする事、1時間。

ようやく村が見えてきた。

「そういや、オレってこの世界だと天界の遣いなんだっけ？……
・天界の旅人のほうが俺にあってるよな？……うん、合っ
る。そうしよう。天の旅人で通そう」

村は活気が無かった。

皆は何かを恐れているような、怖がってるような。
とりあえず、話しかけてみるか。

「なあ、何かあったのか？」

近くにいた男性に声をかける。

「あんた旅の人かい？」

「ああ」

「それは運が悪いな」

運が悪い？何のことだ。

「何があった？」

「この村の太守が黄巾党を煽るだけ煽って逃げたのさ」

「!・・・何で、そんな真似を？」

「けっ、自分に対して少し悪評を言った黄巾党を捕まえて見せしめに殺したのさ」

「・・・・・・」

「そうになったら黄巾党がここを狙う理由ができて、案の定狙ってきただけだ」

「それを知って、太守は逃げ出したのか？」

「ああ、そうだ。戦いもせずに！自分の財産と兵を連れてな！」

男の表情は憤怒に染まっていた。

「逃げないのか？」

「逃げるわけないだろ！ここは・・・・ここは！俺達の先祖が作った歴史のある街だ。それを捨てるわけないだろ！」

鬼気迫る表情で言った。

「・・・・・・なら、戦うのか？」

「いや、無理だ。俺達のほうが数が少な過ぎる。だから、最後の最後まで抵抗してやるんだ！俺達は決して諦めない！」

すごい決意だな。

これが、自分の命まで賭して戦う覚悟を決めた人か。
うん。助けないわけにはいかないな。

「なあ、ならオレも戦わせてくれないか？」

「っ！いい、いいのか？」

「いや、いつそ言う。オレが村を守る。だから、その間村で守りを固めてほしいんだ」

「あんた1人でか！」

「ああ、他の人にも伝えてくれ」

「・・・・・・あんた、何者だ？」

「天界から来た旅人」

ニツと笑って答えた。

村には一刻ほどでこの話は広がった。

俺達はその噂を微塵も疑わずに信じた。

今は藁にもすがりたいほどの思いだったからだ。

後々、俺達は思った。よくあんなのを信じたよな。

あきらかに怪しいのに。

けれど、結局はそいつに守られた。

そしてこれが、各国に『天界からの旅人』の名が広がる戦い。

「よしっ！こんなもんか」

オレは村を囲むように円を書く。

確かに命中率はないが、固定してある物を直接触って使う魔法は得意だ。

「ウオオオオツ！！！」

黄巾党共の声だろう。

まったく、そんな盗賊稼業をするくらいなら真面目に働けばいいのに……あ、そうか。真面目に働いても今の王が駄目だから盗賊なんて生まれたのか……憐れだな。

「まったく、憐れだよ。あんたらもオレも」

自嘲気味に笑い、円に手をつけて。

「確か、風の守り……だから……」

頭の中から詠唱を引きずり出し。

「我は風の使い手、我はここに彼の騎士王の持つ絶対不落の守りを許可する……」

円にライトグリーンの光が走り。

「風神結界！」

街を囲む円のギリギリ外に日本刀を刺す。

すると円の中にあるものを守ろうと風が街を囲む。

こうなれば、街との干渉は不可能。

だが、この術も長くはない。

騎士王の力とは上級の者でも一回も使う事はできないほどの大魔法だ。

だが、北郷の血筋は受け継がれるたびに進化し力と魔力を上げ続ける。

一刀もそれは例外ではないが、まだ未熟なのである。

故に長くは持たない。

大剣を構え、一瞬だけ自分の両腰についた双剣を確認し。

「よっし！準備完了っと。それじゃ・・・・・・・・」

大剣をなぎ払って。

「天界からの旅人、北郷家現当主（仮）！北郷一刀！参る！！！」

この戦いは後に『風神の降り立った戦』と呼ばれる。

九（後書き）

一刀の現当主（仮）と言うのは一刀の祖父に認めてもらってはいり
けど、本人がまだ納得できていないために今は（仮）となっている
んです。

では、また次回にでも。

壱拾 龍との遭遇（前書き）

気分を変えて、タイトルを書くことにしました。
今後とも、よろしくお願いします。

壱拾 龍との遭遇

夜が明け、日がさした。

最初に日が照らしたのは小さな村。

その村は本来、黄巾党に蹂躪され消えるはずだった。

消えていないのは、当然だが黄巾党が来なかったからだ。

では、何故黄巾党が来なかったのか？

理由は簡単。

辿り着けなかった。ただ、それだけの話。

村人はいつまでも来ない黄巾党と帰ってこない自称『天界からの旅人』に不安を感じた。

そして、村人の1人が村の外に出て突然、悲鳴を上げた。

その悲鳴に集まった村人たちも同じく悲鳴を上げた。

当然だろう。

村をでて周りを見渡せば、血に染まった大地だったのだから。

その中に唯一、他とは違う人がいた。

死んでいるわけでもなく、戦えなくなっただけでもない。

無論だが、無傷なわけではない。

「は、あ……何とか生きてたか……」

その青年は倒れた。

村人たちは駆け寄って彼を見るが、寝ているだけだった。

そして、村を出てすぐ近くに刺さっていた日本刀の下には……

「これって……」

「だよな？」

「ん？何か書いてあったのか？」

「ああ、見てくれ」

そこには『風神の守護』そう刻まれていた。

後に語られるが、その刀は『天界からの旅人』以外に抜くことはできなかった。

そして、その刀が刺さっている間はまるで村に風が守るように村を囲っていたらしい。

決して強い風ではなく、ゆるやかな風が。

けれども、矢の一本も通すことのない風の守りだ。

場面は大きく変わり、とある戦場。

「皆、退くな！ 後、少しだ！ あと少し守るのだ！」

戦場にはそぐわない美しい声が響いた。

彼女の名前は関羽雲長（真名…愛紗）という。

今、彼女は公孫賛の援護を待ち続けて守りを固めていたのだ。

しかし、それにも限界がある。

更に言うならそれは近かった。

それ故にこの直後に起こる出来事に彼女の驚きは増える事となった。快晴のはずの空が突然曇りだした。

それと同時に公孫賛の援護が現れた。

このまま行けば何とか勝利できる。そう思っていた、しかし結果は異なった。

荒野を黄色で覆うような黄巾党の群れに一筋の雷が落ちた。

直撃したものは勿論、近くにいた者は無事ではすまないだろう。

そして、それ以上に驚いたのは周囲に雷撃を撒き散らしながら近づく何かだった。

その何かの上に乗っていた2人は、関羽の主の劉備に自分たちも手伝わせてほしいと言った。

この戦は何とか勝利できる戦ではなく。ありえない程の余裕を持った勝利だったからだ。

この2人の名前は『諸葛亮』『鳳統』と言った。
2人は劉備に真名を預け、仲間になった。
雷を起こす、神獣は去っていったが。

一刀は村を助けた後、食料を分けて貰い再び歩き始めた。

その道中でシンと合流し

「ま、あてはまだないしな。適当に行くか」

「劉備殿のところに行かないのですか？」

「今すぐにも行きたいけど……オレはこの世界を見て回りたいんだ」

「……ようするに自分の欲求優先ですか？」

「当たり前だろ、何故ならそれがオレだから！」

「誇らしげに言わないでください！」

怒られた……。

同時刻

魏国の曹操。

彼女の部下、許緒の故郷が襲撃にあうと、そう報告が彼女の親友の流琉からあった。

自分1人ではどうしようもなく手紙を頼りに許緒の元にきたのだ。
そうして、彼女たちの村を助けるため向かったのだが……。
許緒の故郷についたが、その光景を見て呆然としてしまった。
村が悲惨だからではなく、何事もなかった。

いや、むしろ祭りの最中というほどに賑わっていた。

「これは、どういうこと？」

曹操は何事もなく祭りをしている村の様子を探った。

そして、集まった情報は

「天界からの旅人様がこの村を守って下さったのです！」（女性）

「あの神々しい後光、正しく天界のお方じゃ」（老人）

「いや、爺ちゃん。あれは太陽が真後ろにあったただけだから」（老人の孫）

「天界の人とは思えないほどの方だったよ。勿論、良い意味で」（青年）

「村を救って下さったのに僅かな食料しか見返りを求めず行ってしまいました」（青年2）

「えーと、黒い服を着た兄ちゃんだったよ！」（子供）

「あとあと、こゝろゝゝゝんな大きな剣を持っていたよ！（予想するに大剣）」（子供2）

「曹操様が来るのと入れ違いに行ってしまったよ」（村長）
以上が主な情報。

「面白そうね」

曹操は不敵な笑みを浮かべた。

『呉』

そう掲げられた旗がなびいていた。

「へー、ここが『呉の国』か……」

長時間の移動をし一刀は呉の国境まで来ていた。

「なあ、ジン。呉っていうと……誰が思い浮かぶ？」

「ふむ、旅人や商人の話で聞くと。孫家が納めているようです」

「孫家？」

「はい。今は故人の孫堅殿から名を上げ、今は孫堅殿の娘の孫策殿が王らしいです」

「へー」

興味は正直薄い。

何でか、オレは三国志時代の時は授業で寝るし、ゲームにも興味が持てない。

さて何故だろうか？

まあ、答えがどうだろうと現に來た今はどうでもいいし。

「あー、家でヴェス○リアやりてー」

「それは、P S 3ですか？」

「何でお前が昨今のゲーム事情にくわしいんだー？」

間延びした声で大した答えを期待せずに聞いた。

「で、呉に行きます？それとも、まだ魏を回ってみます？」

「任せる」

「はい」

ジンは人に例えると優しい笑顔のように笑い、呉に進んでいった。

「ありえねえよ」

「ええ、そうですね」

余裕のこいつ（ジン）が実にムカつく。

オレたちは、気がつくやうに龍に追いかけていた。

うかつだった、こいつ（ジン）のような幻獣がいるなら他のものもいるはずなのに。

しかも、速いし。スタミナは底なしかよ？

「ジン、追いつかれそうか？」

「それはありませんが、当分は村にも入れませんね」

「そっか……。んじゃ、まあ行くか」

「ジンの横にくくりつけたギターケース（簡易武器庫）から銃を取り出し。」

「主、そんな物まで……」

「えーと、こいつは銃弾なしで魔力をぶっ放す奴だから……」

カチャ、カチャ……。ガチャ

「セット、完了」

直後、不敵に笑い。

「バーストォ！」

龍に向かって放たれた、銃弾は直撃後爆発した。

しかし、数秒仰け反らせただけで効果は薄そうだった。
むしろ怒らしたっぽい。

「おいおい！火吹いたぞ！」

言った直後にジンの数十センチ横に炎が直撃し。

「あ、熱！速く何とかしてください！」

「分かってる！」

ガチャ、カチツ・・・・・・・・ガシャン、ガチツ

「充電中」

「急いでって言うてるでしょ！」

焦りのあまり、敬語でなくなっているがどちらも気にしない。
むしろ、ジンは主のマイペースぶりに若干怒り気味。

「充電完了、フリーズショット」

軽口から出た言葉とは裏腹に威力は絶大だった。

龍どころか、周りの地面まで凍らせていた。

「あの、主？」

「ん？」

「何で、コレ最初に使わなかったんです？」

「だって、疲れるじゃん」

「おい（怒り）」

「それに近いから、下手したらお前まで氷漬けだぞ？」

「え・・・・・・・・（汗）」

さっきとは一変し、分かり辛いが冷汗をかいていた。

「ちなみに、最大までチャージしたから良くて3日、悪くて・・・・」

・
」

「わ、悪くて・・・？」

ジンは悪い予感がしつつも聞いた。

一刀はいい笑顔で

「永久凍結」

そう答えた。

壱拾 龍との遭遇（後書き）

一刀（&ジン）VS 龍で一刀が勝利しました。
ちなみに、『フリーズショット』。

これ、人に使うとどうなると思います？

龍でも悪くて、永久凍結。

・・・・・・それでは、次回にでもまた会いましょう。

壱拾壱 一刀、酒に飲まれる（前書き）

今回は一刀の一部ですね。

北郷一刀の『人間』としての一部を。

彼だって人間なので、傷つきもするし、落ち込むし、酒にも負けま
す。

と言うか、酒には弱いです。

壱拾壱 一刀、酒に飲まれる

さてさて、このオレ。北郷一刀は今、呉の国に来ています。
勿論、観光で。

それで、今オレがいるのは呉で最も大きい街。

その理由は王様がいるからなんだけどね……。

「呉の王。孫策ってのはどんな人なのかね……」
疑問を口にする。

劉備って本当の歴史でも、あんな感じの人だったのか？
ない、よな。

だって、あれじゃ簡単にやられそうだし。

精神的にも強いとは言いがたいような気もする……………。
って、事は元の正史よりずれた感じなのか……………。

天然？

疲れそうだ。

強欲？

関わりたくない。

守銭奴？

もう、死ねって感じた。

駄々っ子？

年によつては、『自分の歳を考えてからにしろよ』とツツコミたい
ところだ。

戦鬪狂？

触らぬ神に祟りなしっていうよな。

悪い方に来ているので、良いほうに考えて見ることにした。

ツンデレ？

おk。ツンデレ大歓迎。

ヤンデレ？

お断り。オレはその手とは関わりたくない。死にたくない。

「はあ、何でだろう。何故か今日はポジティブに物が考えられない」
若干へこんでいる一刀は、適当な酒場を見つけ飯にすることにした。
ちなみに、ジンは騒ぎを起こす可能性大なので外の荒野で待っています。

酒場はもり上がっていて、とても活気があった。

中は・・・なんか、ドラマとかで見るようなカウンターがある店だった。

「おう、兄ちゃん。見ない服装だな？」

見た目こそ違うが、服装を変えれば『マスター』と呼んでいいようなダンディなおじさんがいた。

「どうやら、店員らしい。」

「ああ、旅人なもんで・・・」

「おい、この国は初めてか？」

「そうなんだ、実は今日ついたばかりで・・・それにしても活気があるな」

「ああ、孫策様のおかげさ」

孫策・・・なるほど、王が何かしたのか。

「おかげって言うത്？」

「ああ、ちよっと前から騒ぎを起こしてた奴ら・・・黄巾党を追っ払ったのさ」

「へー、って事はこの街はもう襲われる心配はないって事か？」

「黄巾党にはな。最近では、国中の戦争も続いているしいずれはこの国も、な」

見る限り、戦争を体験した事があるように見えた。

よく見れば額に傷があるし。

いきなり人が飛んできて、オレとマスター（何か見た目がぼいので

そう呼ぶ）の間に落ちた。

「おー、痛そうだな」

「ははは、こんな風に殴り合いで人が飛んでくるのも日常茶飯事さ」
マスターは笑って答えた。

「それより、なんにする？」

「んー、とりあえず。腹の膨れる物くれよ」
今、思えばこれは失敗だったように感じる。

この後、オレは気がつかずに一緒に出された酒を飲んでしまった。
全く飲めないわけじゃない。

だが、オレは一定以上飲むと・・・・・・・・。

「オラァ！」

ドスッ

「かかってきやがれ！」

ゴスッ

ドンッ

「こんなもんかぁ！！」

暴れるのだ。

しかも、記憶がある。更に冷静な自分がいるのに制御できないから
厄介だ。

さっきまで、暴れていたチンピラ全員がオレをターゲットに変えて
襲い始める。

当然、応戦し。

その結果がコレ。
死屍累々である。

「けっ、雑魚共が」

自分でも口が悪くなるのは自負している。

だから、酒を飲まないように気をつけないといけないのだ。

「お主、大丈夫か？」

そんな、オレに声をかける人がいた。

白い髪的女性だった。

身長がオレよりちょっと下ぐらいかな。

白い髪的女性と言っても老人ではなく若い人だ。

おそらく髪の毛は地毛だろう。

だが、そんなオレとの意思に関係なく。

「はあ、オレ様が傷1つでも負うわけないだろうが」

はあ。何様だ、酔った時のオレ。

その女性にビンと杯をむけて。

「うっし、飲むぞ。付き合え！」

見ず知らずの女性を無理矢理に付き合わせる事になった。

「この歳になって若い男に酒に誘われる事になるとは思わなかつ・

・・・」

「言葉はいらねえ。飲め！」

「ふむ、しょうがないのう」

飲み続けて約30分。

「おおっ、良い飲みっぷりじゃのう。一刀！」

「そういう祭もな！」

俺達はわずか30分で打ち解けあい、真名を許していた。

そこに

「見つけましたよ、祭！」

酒場に声が響いた。

「いないと思ったら、酒場で飲んだくれてるなんて・・・」

「いいじゃないか、公謹」

「いいわけ・・・」

途中、一刀が公謹なる人の肩を掴み。

「オレらはな、酒飲んでんだ。話があるってんなら」
もう片方の手で酒瓶を持ち。

「お前も飲め！」

偉そうな自分にかんりの殺意を向きたいが、向けられない状態でいる冷静なオレ。

「飲むわけ……」

「そうじゃ、公謹。お主も飲め」

もう片方の肩を掴みいい笑顔で祭は言った。

公謹に残された選択肢。

A 戦う⇒一刀無双に合う⇒飲まされる。

B 話し合いで解決⇒酔っ払いには効果がない⇒飲まされる。

C 助けを求める⇒さっき一刀に負けたばかりで全員無視⇒再びこの選択肢へ。

D 逃げる⇒一刀に捕まり再びこの選択肢へ。

E 諦めろ（へωへ）b

公謹はこう思った。

この2人から逃げるのは不可能だ、と。

そして、俺達は孫策の妹の孫権さんが来るまで飲み続けていた。

そして、目覚めたオレは……。

「あ、頭が……」

二日酔いだった。

状態異常…二日酔い

魔法の詠唱速度1／10。

速度半減。

クリティカル率－40%。

何のゲームの状態異常？

「最悪だ……って、何でオレはベッド寝てんだ？」

見ればあたりはどこかの屋内で整った、部屋のベッドでオレは寝ていた。

荷物もあるし、孫権さんが来て、その後……どうなったの、オレ？

「あゝ、やっと起きた！」

幼さの残る声が聞こえその方向には孫権さんを子供っぽくし髪型を変えたような子がいた。

「えっと……孫権さんの……妹だよね？」

「そうよ、それで大丈夫なの？」

大丈夫？二日酔いはひどいかも知らないがそこまで気にすることでもないし……。

「覚えてないの？」

「何を？」

「昨日、お姉ちゃんが……」

記憶が蘇る。

そうだ、孫権さんが来て飲み散らかした酒瓶をいくつか拾って、こっち歩いてきて。

足元にあった、他の酒瓶を気付かず踏んで。

全部、オレの頭へ……

「すごかったね、あれだけ酒瓶を頭で割って無傷なんて……」

「あ、ああ。頑丈、だからな」

苦笑いして答える。

待て、落ち着けオレ。

オレは昨日、祭と公謹さんと飲んでいたはずだ。
確かに孫権さんは来た。

だが、何故オレは孫権さんの家（妹と名乗る子がいることによりほぼ確実）にいるのだ？

だって王家だろ？

そんな簡単にまったくの他人を入れる意味が分からん。
そも、オレを警戒していいはずだろう。

なのに、王家の子がオレの前にいるて……。

ガチャ

新たに扉が開き。

「目が覚めたかしら？」

優しい声だった。

入ってきた女性は

「露出が多い！もっと恥じらいを持て！」

と言いたいが、昨日の偉そうな自分を見て他人に何かを言う資格があるのか疑問を持ってしまった。

なので

「ああ、おかげさまで。ちょっと頭は痛いが……」

「そう？それじゃ、こっちに来て。酔い冷ましがあるからいい人だ。」

こんな親切な人に出会えるなんて、最高だ！

「こらあ！お姉ちゃん、シャオが先に来たんだよ！」

「小蓮」

お姉ちゃん？

！

ま、まさか。

孫策さん！

この人が！？この優しそうな女性がッ！！

「弱肉強食よ」

オレには分からない姉妹の会話が行われた後にオレは孫策さんに連れて行かれた。

壱拾壱 一刀、酒に飲まれる（後書き）

今回は酒に飲まれた一刀とそれを冷静に見る精神の一刀でした。実際、『酒は飲んでも、飲まれるな』といいますし。皆さんも、お酒はほどほどに。

さて、孫策（雪蓮）さんの性格は、何となくでやっているのでアドバイスをいただけると非常に助かります。

あと、『フリーズショット』あれはまだ凍結程度の能力ですが派生した技には恐ろしいものができあがります。

それこそ、グロデスクな能力が（汗）。

それでは、また次の時にでも。

壹拾貳 呉での日々（前書き）

何を書いていいか、分からないです。
とりあえず、更新が遅れて申し訳ないです。

壹拾貳 呉での日々

「ご馳走様でした」

オレは、箸を置き手を合わせ言う。

酔い冷ましというよりも普通の朝食のような感じで頭がすっきりした。

一刀…状態異常解除

さて、オレの隣にはさっきから笑顔を向けている孫策さん。

そして、目の前の席に孫策さんと孫権さんの妹さんがいたりする。

「あら？意外と小食なのね」

孫策さんは珍しそうに言った。

「ああ、まあ事実あまり食べないほうだな……………」

オレが小食なのは力を消費しないからである。

逆を言うと、力を使いすぎたら人の何倍も食べると言う事である。

「男の子なんだからもつと食べると思ってたんだよね……………」

少し残念そうに孫策さんは言い、オレと目を合わせ。

「ところで、あなた異国から来たのよね？」

「ああ、そうだけど」

「なんて国から来たの？」

「……………」

なんと答えるか困ったが。

「日本って極東の国から来たんだ」

嘘ではない。間違ってもいない。時間軸は大きく異なるだろうが。

「日本……………聞いたことないわね」

むしろ、この世界でオレ以外知っている人がいれば異常でしかない。

「多少、騒ぎはあるが良い国だな」

とりあえず、話題を逸らすことにした。

「でしょ？でも、戦争が絶えないのよね」

孫策は苦笑いして言った。

「でしょう、戦争は人がいる限り続くものですから。戦争がないのは人が心を失ったに等しい事ですから」

「難しい事言うわね．．．．．」

「そうですか？」

「そうよ、冥琳と同じで．．．．．」

「めー．．．．．？」

オレが言いかけた時、扉が開き新たに3人入ってきた。
昨日見た人たちだ。

祭、公謹、孫権さんだったな。

とりあえず、祭に近づき。

「どうだ？酔いは醒めたのか？」

「おお、一刀。実は酔いがまだ醒めてなくてのう。これでは責務が．．．．．」

いかにも嬉しそうに祭の後ろに公謹が立ち。

「祭殿、いかなる理由があろうとも休ませませんよ」

頭に鬼の角が付きそうなオーラで言った。うーん、怖い。

「公謹、わしはどうも二日酔いがひどくて．．．．．」

「却下です」

誤魔化そうと必死な祭の言葉を切り捨てた。

「一刀．．．．．」

助けを求められた．．．．．。

仕方ない。

「公謹．．．．．さん。さすがに無理させても良くないでしょうし、責務は少し休んでからでもいいのでは？」

笑顔を向け言って見る。すると、「甘いんだから」と目で言い。

「しょうがないわね」

そう言った。

それから、オレは孫策さんに。

「楽にしてていいわよ」

と言われ放置状態になっていた。

身元も分からん男を放置っていいのか？

仕方ない、どうせゆっくりするつもりだったし久々にギターでも・・・

「そーいや、ギターは酒場からどうしたっけ？」

酒場で大騒ぎ。

←

孫権さん来る。

←

オレの頭にビンを落とす。

←

オレ気絶。

←

孫権さん知ってるかも？

そうと決まったら、孫権さんを探しに行く。

「おーい、孫権さん！どこですか？」

とりあえず、声を出して探し始める。

歩き回り、探すも中々見つからない。

「どこだろうな・・・・・・？ん、ここは中庭か？」

闇雲に歩き回っていると中庭にでた。

そこには無表情のすらりとした女性がいた。

孫策さんらはすごかったからか、あの女性の胸が可哀想に見えてしまう。

そんな事を思いつつ、近づいていく。

「すみません、ちょっと聞きたいんだけど。孫権って人がどこにいますか・・・」

そう言いかけた時違和感を感じ体を少しずらした。
すると数秒前にオレの頭があった場所が刃のようなものでなぎ払われた。

ありゃ、首が落ちてたな。

「おいおい、何で殺されそうになってんのオレは？」

「貴様何者だ！！！」

「聞いてないのかよ。ただの旅人だよ……」

「ありえないな、ならば何故気配を消し私の後ろに立った！！」

「まぐれだよ。オレみたいな旅人が普通に将の背後を取れるわけないよ」

「……」

少し睨み、溜め息をついた後。

「……それで、何のようだ？」

「物を無くしてね、孫権さんなら知っているかも知れないと思って探していたんだ」

「……」

真意を探るように、オレと目を合わせる。

オレは、笑顔で答えた。

「……分かった。案内しよう」

「そりゃ、どうも」

そういえば、武器もないんだよな。

「私を見たとき、哀れんだ目をしていなかったか？」

「気のせいだろ」

武器もないんだよなあ。

「この部屋だ」

案内されて、今は扉のまえだ。

「すごいです！こんなの初めてみましたあゝ！」

どこからか、甘ったるい声が聞こえてきた。

「穏！それは雪蓮姉さまの客人の荷物だぞ！」

「これは・・・琵琶ですかね」

「穩！聞いているのか！穩！」

「こっちは、見たことのない衣服ですね」

「・・・もういい」

孫権さんの諦めたような声が聞こえた。

プツン

「・・・？」

私が案内してきた男のほうからおかしな音が聞こえ、振り向くと。

「・・・オレのカバンを無断で見た奴は神であろうとも」
とてもイイ笑顔で奴は言った。

「殺す」

瞬間、そいつは私の視界から消えて扉が数cmだけ開いた。

「本までありますう！」

穩が客人殿の荷物を漁り始めて少し時間が経つ。

穩がこうなったら、止める事は誰にも・・・。

「ひうう！？」

穩の悲鳴が聞こえた。

振り向けば、鬼というにも表現にも足りない何かがそこにいた。
穩を猫のように掴み上げて。

「オレの、カバンを勝手に漁る奴がいるとはな」

黒い笑いを浮かべ。

穩は涙目になりながら、掴み上げた男を見る。
しかし、それは失敗でしかなかった。

「さて、苦しまず死にたいか？それとも・・・」

いつの間にか、その手には大剣が握られていて。

「こいつで体を解体されてから死にたいか？」

首の近くに向けながら、イイ笑顔で言った。

「ご、ごめんなさいいゝ！」

穏があそこまで、必死に謝る様を初めて見た気がした。

「ひっく、ぐすっ」

「穏、もう大丈夫だから落ち着け」

孫権さんが、オレのカバンを漁った奴をなぐさめているようだがとりあえず無視して確認をする。

「ギターは……よかった、何とも無い。服も……大丈夫みたいだな」

とりあえず一安心。

ただ、カバンのほうに入れておいた楽譜の一部がにじんでいた。

この楽譜は、オレ達のバンドメンバーが最初のライブでやったもの。早い話、思い出の品でもあるのだが。

「服の袖から短剣を取り出し」

今の自分を口で説明し始める。

「オレは、奴を仕留めようと急所に狙いを定める」

「お、落ち着け！お前まで感情的にならては！」

「……うむ」

とりあえず、落ち着いた。けれど、すぐに……

「孫権さん、オレはそいつを仕留めたいからどいてほしいな」

極力、笑顔で言う。

「だから、落ち着け！確かに穏が悪いがそこまで怒らなくても！」

「まあ、そういえばそうだな」

再び落ち着く。

こっちはコピーで、オリジナルは家に置いてある事を思い出し怒りを納める。

とりあえず、ギターケース（以降、簡易武器庫）の二段目の銃、短剣、その他を確認して。

「ま、いいや。その……名前はどうでもいいや。もう怒ってはないから」

面倒くさそうに言った。

「ほ、本当ですか・・・?」

「ああ、オレは優しい人間だからな」

注意

悪意…気まぐれ…善意

20…75…5

一刀の構成比率。

ちなみに善意は全て劉備に使っている。

「よ、良かったです」

緊張が一気に解けたらしく安心した様子で一刀に近づく。
が、一刀は穩の両肩に手を置き。

「許してはないけどな」

死刑宣告を笑顔でつけた。

「え、ええ!」

目を白黒させ混乱に陥った様子を見て一刀は笑い。

「冗談だけだな」

穩の頭に手を置いて撫でた。

「ほわぁ」

気持ち良いらしく、口から何かが漏れていた。
魂らしきものが。

「!」

「の、穩!」

騒ぎを起こす元凶ってオレなのだろうか? 最近そう思えて仕方が無い。

そして、部屋の外では甘寧（真名…思春）が入るに入れない状況が続いていた。

壹拾貳 呉での日々（後書き）

今回、穏と思春が登場したわけですが本作と違ったかなと思ったりしました。

相変わらず、自分に自信が持てなかったりします。

まあ、それは置いておくとして。

これから、少しだけ呉に滞在させるつもりです。

目標としては雪蓮さんと冥琳さんとの好感を上げて、呉を離れて違う国に一刀が行っても仲が良い状態を続けさせたいと思います。

壱拾参 ギター

とりあえず、オレは荷物を取り戻し借りた部屋に向かう。

部屋は、見通しが良く、風通しも良い。

部屋の隅に荷物を置き、ベッドに腰掛けて。

「そう言えば、こいつ。こっちに来てからは全然使ってなかったな・
・・・」

ギターの整備を始める。

一刀は、剣士であると同時に整備なども得意なので色々な仕事を引き受けてきたので大半の事はできる。

「終わったら、久々にやってみようかな・・・・」

政務室

今現在、祭と冥琳によって使われていた。

「のう、公謹？」

「何です？ 祭殿？」

「最近の噂で、商人も言っておったが・・・・『天界からの旅人』なる者が旅をして回っておるのは知っているかの？」

「ええ、『旅人』は目的無くただただ民を助けて回っていると聞きますね」

「そうじゃ。それで、新しい噂では黒の服を纏っているようじゃぞ」「そうなのですか？」

「ああ、それに身の丈を余裕に越す大剣を振り回すという話じゃ」

「祭。それでは、まるで北郷を『天界からの旅人』と言っているように感じるのですか？」

「もしかしたら、じゃ。まあ、一刀がそうであると嬉しいのじゃがな」

祭は窓の外を眺めながら溜め息をつく。

「フフフ、このような気持ち。二度とは無いと思っていたが、悪く

ないものじゃな・・・」

目を細め、空を眺める。

「お姉ちゃん!!」

雰囲気を一瞬で粉々にする声が響いた。

「小蓮、こっちよ」

「待てー！ーっ！」

足音が廊下に響き、遠ざかって行った。

「相変わらずじゃな」

「そうね」

公謹も目を細めて、空を眺める。

「お茶に・・・しょうか、祭」

「・・・そうじゃの」

和やかな時間を過ごそうとするのだが、それを許さない者がいた。
いきなり扉を開き。

「祭！冥琳！隠れさせて！」

無邪気な笑顔で入ってきた孫策には驚いた様子もなく。

「いつも通りね」

「いつも通りじゃな」

空を眺める2人がいた。

「お姉ちゃん!!もう逃がさないよ！」

小蓮も部屋に入ってきた。

「しょうがないわね。小蓮、邪魔するんなら容赦しないわよ」

「お姉ちゃんこそ、邪魔するんなら容赦しないからね！」

姉妹の戦いが始まりそうなので。

「雪蓮、一応聞くけどどうしたの？」

呆れながら、一応理由を聞く事にした。

「聞いてよ、冥琳！一刀と一緒に遊びに行こうとしたら、小蓮が一刀は私の！って言って独り占めするのよ！」

子供のように拗ねながら雪蓮は言った。

「それは、よくないのう」

次に話したのは祭だった。

「一刀とは、わしが最初に出会ったんじゃ。だから、わしの物じゃろ」

自己所有物宣言だった。

「はあ」

公謹は呆れた溜め息をはいた後、部屋を出る。

「北郷に部屋に足りない物が無いかな聞いておかないと……」
もし、本当の『天界からの旅人』ならばここを気に入ってもらえば悪いことにはならないはずだからだ。

少し歩いた所で音が聞こえた。

聞いた事の無い音、美しいとは言えないがきれいな旋律、かすかに聞こえる歌。

進むにつれ、声と音が聞き取れるようになる。

きれいな旋律が耳に響く。

「――――」

暖かい声、暖かい旋律が響く。

「♪♪♪♪……♪♪♪♪」

自然と歌詞を呟いてしまった。

扉を開くと、一瞬だけ見渡す限り緑の野を幻視する。

北郷を瞳を伏せ、琵琶のような楽器で音を奏でながら歌っている。
曲が終わる、私に気付き北郷は困ったように笑う。

「よ、よお。いつから……聞いてたんだ？」

「途中からだ。廊下を歩いているとききれいな音が聞こえてな」

「そっか。そんじゃ、せっかく来たんだしさ。楽しんでいけよ」

そう言って、北郷は子供のように笑い、私を椅子に座らせて。

「ようこそ、北郷一刀の音楽会へ」

おじぎをし、いたずらっぽく笑い。

「それじゃあ、第一曲から」

新たに引き始めた曲は冬を幻視する。

瞳を閉じれば、今まで一回だけ見た『雪』を思い出せた。

雪蓮と小蓮の2人はあの後、妹の孫権『蓮華』によって止められ説教を受けていた。

「まあまあ、蓮華様。そのへんでお終いにしましょうよ」
穩の一声でようやく終わりを告げた。

「――――♪」

ほんの微かな音だが、この部屋にも音が届く。

直後、静まる。

そうすれば自然と、音が届くようになり。

そして、音よりも小さく声が聞こえる。

暖かい声、最近現れた男。

北郷一刀の声だ。

「なかなか良い曲じゃの」

祭がそう声に出し、部屋を出る。

残りの4人も同じく部屋を出て音の聞こえる場所へと進む。

孫策が扉に手をかけてゆっくりと扉を開けると、一刀のベッドで眠る公瑾『冥琳』がいた。

そして、椅子には一刀が座り。

歌っている。

歌う。

彼は歌う。

彼自身が綺麗だと思い、良いと感じた曲を。

素人だが、それでも素人なりの上手さがある。

だから、歌う。

彼がどんなに時を経ても、その歌を忘れる事のないように。

自分自身に歌う。

自分自身に刻み込むように歌う。

しかし、その歌が途切れる。

「何だ、来てたら声をかけてくれればいいのに」
困ったように彼は笑う。

「一刀〴〵、いいからさっきの続き歌って！」

「そうじゃの、ほれ。続きじゃ」

「一刀！早く！」

小蓮、祭、雪蓮の順に言われ、わかったと答えてから。

「・・・・・・・・・・」

曲の続きを紡ぐ。

彼の最も好きな曲を・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・ふう」

あれから何曲か弾き、終わる頃には日が真上にある、どうやら昼あたりのようだ。

祭と公謹さんと孫権さん以外は、寝てしまっていた。

「寝てるな」

心地よくて寝たのか、退屈で寝たのか、微妙だな。

この日、夕方まで弾き続けた。

ちなみに居眠り組が起きたのは更に後で仕事に追われているとか。

壱拾四 猫と？

夢を見た。

それは、燃え盛る大地。

比喩ではない。

本当に焼き払われているのだ。

見たこともない大地で、多くは焼かれ死した者はもはや人の形をしていない。

黒い髪の男と金色の髪の男が戦っていた。

黒い髪の男は、紅と蒼の剣を振るう。

金色の髪の男は、狂気な笑いと快楽に叫びながら魔法を使う。

「死ネ、死ネ死ネ死ネエエ！」

理性があつてこの状態なのだ、正直黒髪の男にとっては迷惑でしかない。

翻弄し、追い詰めるが狂った男は、黒髪の男の家族を殺そうとする。それを庇い、彼は絶命した。

そして、守られた男の子の顔に大量の血が飛び散った。

「・・・・・・・・！」

また、あの夢か。

今のは・・・・・・・・親父が殺された時の記憶。

記憶に断片だけが残っていて、あの時に何が起こっていたか分からなかった。

「まだ、夜明けか。しょうがない・・・・・・・・外に出るとしよるか」
日がようやく顔を出し、辺りが少し明るくなっている。

城門に登って、辺り一帯を見回す。

特に目立つものは・・・・・・・・何もない。

おいおい、まだあの龍の氷漬けが残ってるぞ？

いい加減溶けるか、砕けるかするはずなんだが・・・・・・・・？

ああ、そうか。

中途半端に溶けているから、砕けもせず、溶けもしないのか……
・・納得。

城門から飛び降りると、木に猫が10匹ほど集まっていた。

「ちょうど、残飯ならあるしな……」

手早く残飯で猫の食事を用意して、猫に近づく。

「猫共、飯だぞ」

言葉が通じたらしく、猫が一斉に集まってきた。

とりあえず、木に腰を下ろして。

全員に行き渡るように食べ物を配る。

「癒されるな」

うん、オレの目が多分スゴイ和んだ感じになってるんだろうな……
・・。と思いつつもやめない。

頭を撫でて逃げず、抱き上げてても大人しい。

懐かれたか？

いい事だよな、動物と仲良くできるって。

毛並みがイイ猫が多いな。

特にこの黒い毛の、触り心地の良い……猫は……？

目を開けてみると、今、オレが抱えているのは猫ではなく人間だった。

軽すぎて気がつかなかった……。

とりあえず、首をがっちりと掴み上げて。

「おい、猫にまぎれて何やってんだ？」

「ほわぁ」

聞いてねえし。

オレは、とりあえずこいつを地面に下ろし猫共に。

「やっちゃんナ」

指差して冗談半分で言ってみた。

「きゅん」

うん、まさかマジで猫が集団で襲うとは……。
そして、猫が集団で襲いかかれば人間に勝てるとは……。

その他にも、色々ほっという置いて、言わしてもらおうと。
身長は子供と変わらないな……。中1？ぐらいの身長か。
いいや、放置決定。

「じゃーな、猫共」

『にゃ』

バイバイと言うように猫共は一斉に鳴き声を上げた。

「まあ、猫に懐かれるってのはいいもんだよな」
冬場には最高なんだがな……。

次にオレは、倉庫に向かった。
本やら古い道具が多くあるので、見てみるのも面白いと孫策が言った。

「なるほど、さすがに読めないけど……。興味深いな……」

最初に見つけたのは何かのレシピ。
気になるので読み始めたのだが、挿絵ぐらいしか分からないので中々苦勞している。

「ふむ、こっちの本は絵本か？」

絵がほとんどの本だった。

色々な本を探すこと10分。

「……。やっぱ、文字が読めないのは致命的だな」

この時、オレは気がつかなかった。

後ろから来ている彼女に。

壱拾五 o r z (前書き)

花粉症の季節になりました。

辛いです。

更新遅れてすみません、マジで。

壹拾五
o r z

中庭でオレは剣を振っていた。

理由を聞かれば日課だからだ、
としか言えない。

書物の事は、陸遜が明日から文字を教えてくれるらしい。

風が頬を撫でて、ふと空を見上げると……もう夕方だった。

茜色の空が広がっている。

大剣を掲げて、日に照らす。

「コイツを持ってもう何年だっけ？」

北郷の大剣。

親父の数少ない形見のひとつだ。

ちなみに言うと、親父はほとんど自分の物を持っていないからだ。

そして、あの夜の火事で更になくなった。

この大剣も、見つかった時はほぼ全壊状態だった。

師匠が知り合いに刀剣に詳しい奴がいるから任せろ。と、言ってきた

たので預けると。

「今のこの武器か。FF7ACのク○ウドの大剣とを考えてくれば、

「おおよそ間違いない」

まあ、これはあの剣みたいに複数にわかれなないのだが。

「北郷の剣術って考えれば考えるほど妙だよな……」

全ての剣に対応して、複数の武器を扱い、更に魔法にも通じる。

十六夜ノ太刀、波高衝、空燕。

北郷の剣術の基本の技の3つである。

いずれも派生系が複数あるので必須になるのだ。

我ら、北郷は常に■■■■■を守るためにあるの

だ、と。

北郷一刀の欠落した部分。

思い出せない何か、大切な人に教わった大切な事。

それを取り戻さない限り、自分は北郷の剣術の正当な後継者にはなれない。

一刀自身はそう考えている。

「いつか、取り戻してやる。いつか、必ず……！」

それは、本当に偶然だった。

廊下を歩いていたら2人は、いつも通りに歩いていたのだから。

「雪蓮、いい加減歩き回るのをやめて仕事をしてくれない？」

「ええ、もう少しだけならいいじゃない」

まったく、と思いながら。

自分も甘いのだな、と反省しつつ不意に中庭を見た。

「あれは……北郷か？」

あの服装は1人しかない。

「え？本当に？一刀、どこどこ」

子供のように辺りを見渡す。

「あ、いた……」

雪蓮も見つけたようだったのだが、明るい声ではない。

再び、北郷の方に目を向けると、なるほど、と納得した。

中庭で大剣を掲げている北郷の姿。

その背中には、この国の英雄の姿を思い出させる。

「孫堅様を思い出させるな」

私は呟いた。

「母様か……確かにね。でも、一刀のように母様は優しくなかったけどね」

「雪蓮を思うが故、だろう」

「……分かってはいるんだけどね。やっぱり、普通の家族みたいに接したかったな」

「普通の家族？」

「うん、王族としての。じゃなくて1つの普通の家族みたいに」

「なるほどな、それでもすぐに飽きそうだな」

「そんな事ないと思うんだけどな」

雪蓮は笑って言った。

「よっし、それじゃ仕事に励みますか、行こう冥琳」

どうやら北郷のおかげで、雪蓮が珍しく自分から政務をやる気になったようだった。

夜当たりにでも、飲むように誘ってみようか。

地面に正座をして、気配を絶つ。

大剣は、オレの横に刺っているが気にしない。

体を廻る『氣』。主に身体強化に適した力。

体から溢れる『魔力』。主に放出する事で真価を発揮する能力。

星を廻る、いわゆる星の血『星脈』。全ての命に等しく力を与える。例え、この世界が並行世界であろうともそれだけは変わらない。

これらの力の原則を理解を深めることで、新たな力を得る。かもしれない。

故に今は集中以外の物は不要。

「猫を操る妖術師？」

「はい、油断しておりました。あのような輩の侵入を許すとは、そして御猫様を操るなど！」

1人で怒りが上昇している周泰、それに苦笑いをしている蓮華。

「それで、その侵入者の特徴は？」

蓮華の表情が引き締まる。

「はい、ちょうど中庭にいる青年のような……って、侵入者発見です！」

「え？ちよっと、明命。一刀は違うわよ」

蓮華の制止も虚しく、特攻をかける明命だった。

うーむ、どんなに集中していても音だけはどうしても聞こえてくるな。

なんつーのか、こう、ドドドドドドってな音が。

アレか？モンハンのクエストか？ドドブランゴか？討伐か？狩猟か？
なんてバカな事を考えていると。

「覚悟ッ！」

「へ？」

ズバッ

ぶった切られましたorz。

壹拾五 O r Z (後書き)

壹拾六 2つの選択肢（前書き）

花粉症が悪化しました。

対策食品に杏仁豆腐があるのを初めて知りました。

今回は珍しく、ややシリアスですので。 m (|) m

巻拾六 2つの選択肢

この国に来てから、夜は必ず酒を飲むようになっていた。おかげで、耐性がつき最近は面倒な人格が出ることはなくなった。そして、昼間の記憶がなぜかとんでいるが何故だろう？

城壁に座り、祭からもらった酒を飲む。

目が覚めてからすぐに、街におりて情報屋から話を聞いた。

どうやら劉備達は、仲間を揃えて領土を拡大させているらしい。

そして、魏という国も勢力を広げているようだ。

この『呉』、劉備達のいる『蜀』、そして『魏』。

三国志って名前がついたのは、だからか。

帰ったら勉強してみるか。まあ、帰る事ができたらだが。

「酒って、以外に上手いもんだな・・・」

この酒、親父や爺さんと酒が飲みたかったな。

飲み終わり、城壁から飛び降りる。

静かだった、不気味なほどに。

風の音以外に何も聞こえないほどに。

妙だ。まだ多少は灯りが街にあるのだが、風以外の音がない。

酔った頭が醒める。

来るぞ

頭の中に声が響いた。

夢の中で聞いた声だった。

オレと似た声、けれど知らない。

でも、聞いたことのある違和感を含めた声。

お前は？

街に急げ。奴らはもう入ってきてる。

声は消えた。

幻聴だったのか、それとも違う何かなのか。

どちらであろうとも、オレに知る事はまだできない。

部屋に戻って大剣を背負い、双剣を腰にさし、銃を装備する。

今宵は、満月。

妖^{あやし}が力を得るのに十分。

見過ごす、という選択肢は許されず。

また、敗走も許されず。

今夜は……長くなりそうだ。

街には灯りはあれど声は無い。

灯りはあれども、民家に人の姿はない。

気配もなく、まるで誰も居なかったような事さえ感じさせる。

足音も気配もなく、黒いローブと白の布で姿を隠した連中が現れた。

数にして10人。

各々の武器は、剣、斧の2種類のみ。

双剣を抜くが構えはしない。

本当にこれだけの数なのか、目的は何かを知ることが今の重要事項だ。

「目的は、何だ？」

「北郷一刀は悪。故に滅ぼす」

「我らを狂わすイレギュラーを消す」

「お前は、世界に破滅を及ぼす」

「故に我らが消す」

なるほど、鏡を盗もうとした奴らの仲間だな……多分。

「かかってくるなら、皆殺しにする。いいか？」

『ぬかせ!』

全員が同じ事を言い、同時に襲い掛かってきた。

「風神結界・烈」

片方の剣を地面に刺す。

オレの足元の地面に術式が現れ、術式の外に暴風が吹き荒れる。

「ぐっ、近づけん」

「しかし、それも時間の問題だ」

「烈ってのは……」

瞬間、術式の回りの地面が刃状になり延びた。

「こういう事」

下手に近づいていた、連中はこれで終わり。

残りは3人。

地面から剣を抜くと、刃状になっていた地面も元に戻る。

「遅いんだよ！」

1人は首、1人は左胸、最後の1人は頭。

弱いが群れで来られると迷惑だ。

「やるようだな、北郷一刀」

「お前か……」

この世界に飛ばされる原因となった男。

「おい、オレを元の世界に帰せ！」

「何をふざけた事を！ 貴様のせいでこの外史は穢れてしまった。貴様のせいでだ！」

「穢れ？」

「だが、まだ修正できる貴様を消せば！」

「オレを帰せない理由でもるのか？」

「貴様が消える、というのはこちらで死なないという意味が無いんだよ！」

言い、奴は蹴りを仕掛けてきた。

後ろに飛び退き、距離を取る。

双剣の片方をしまい、銃を取る。

「剣と銃だと？」

ガンブレード
「本当は銃刀のほうが好きなんだがな！」
剣で一閃する。

「くっ、素早さだけは一級という事か！」

「速さだけじゃないぜ、SET！」

銃に光が灯る。

「オレはな、自分の力で使う魔法だと命中は最悪なんだが……」

超高速の銃弾が男の足を貫く。

「なっ、にい！！」

「この通り武器を媒介にすれば超一級の魔法が使えるのさ」

「貴様は、音も反動無く撃てると言うのか！？」

「不可能と無理を可能にするのが北郷の魔法使いさ」
大剣をかかげる。

「終わりだ」

振り下ろそうとした瞬間、体が動かなくなった。

「っ！？」

「ふー、どうやら左慈は無事の様子ですね」

男の隣にもう1人現れた。

「てめえは誰だ？」

ほぼ同じ服装をしているところを見ると奴らは仲間のように見える。

「私は、干吉。そして、彼は左慈。ボロボロですね、左慈」

「そんな事を言うために来たのか？」

「まさか」

干吉は笑いながら一刀を見る。

「北郷一刀、交換条件を持ってきました」

「交換条件？」

「はい、あなたが私達を見逃してもらうためのです」

「……」

「勿論ですが、立場的にはこちらが下なのであなたが同意する義理はありません」

干の顔から笑いが消え、真面目な顔になる。

「が、もし見逃して貰えないならこの国のあなたの友人に呪いをかけさせていただきます」

「お前！」

「怒らないでください、見逃してくれさえすれば何もありません」

「何が立場が下だ……」

そう吐き捨てる一刀に笑いかけて。

「こちらからはもういくつかあります、いかがですか？」

「ちっ、分かった」

体に向けられていた動きを封じる呪いを無理矢理に解く。

「ありがとうございます、あなたにはこの呪いなんて足止め程度にしかありませんから」

左慈は、忌々しそうに干吉を睨む。

「睨まないでください、左慈。あなたが死んでは元も子もありません」

「くそが……」

やれやれという動作をして一刀を見る。

「まず1つ、この世界についてです」

「！何を言うつもりだ！」

干吉が止めようとする左慈の首に手刀をいれ気絶させる。

「この世界については、ある程度知っているでしょう？」

「ああ」

「この世界からあなたが帰ってしまえば、この世界は消えてしまいます」

「？何故だ？」

「この世界が不安定だからです。いつ崩れてもおかしくありませんでした。ですが、あなたがこの世界に来てから安定しているのです」

「……」

「あなたはどうやってこの世界に来ましたか？」

「……鏡、銅鏡に吸い込まれてから……のはずだ」

「何故あなたが、銅鏡に吸い込まれてこちらに来たと思いますか？」

「理由があるのか？」

そう言うとき吉は、笑う。

「いいえ、『ただ』の偶然です」

ただ、の部分を強調して言った。

「なのであなたが元の世界に戻ると、こちらの世界は壊れてしまいます。ようやく得た、北郷一刀という安定器を失えば今までの分も含めて一瞬で崩壊するでしょう」

「・・・・・・・・そんな事、オレの知った事じゃない」

「嘘、ですね」

オレの言葉を即座に否定した。

「その言葉が本当ならば、この世界の友人達への呪いをかける。なんて事ではあなたも条件に納得しなかったでしょうから」

「っ！」

「あなたは、人との繋がりに飢えている。両親を亡くし、父親のようだった祖父がいた。だが、母親代わりはいなかった。だから、あなたの心は満たされなかった。いつもいつも、笑う中、満足する中で何か物足りなさを感じ続けていた。それを埋めようとあなたは、必死に人との繋がりを求め続けた。違いますか？」

「・・・・・・・・」

頭の中は冷静だった。

まるで、心の中を読まれたような気分だ。

つくづく嫌になる。

オレとは繋がりの無い世界、関係の無い世界のために帰るチャンスを手放すというのだから。

「まあ、それは良いでしょう。交換条件の2つ目です。劉備が殺されるかもしれませんよ？」

「・・・・・・・・何故だ？」

「あなたが、居ることで世界は安定しました。ですが、その分異常も発生するのです」

「・・・・・・・・」

オレのせいで、また誰かが。

言い切れぬ怒りのあまり、齒軋りをしてしまう。

「あなたがこの世界で死んでくれれば、良いんですがね」

干吉は、悪意の無い笑みでオレを見る。

「それは、どういう意味だ？」

「言ったでしょう？あなたが元の世界に帰ればこの世界が壊れる。

要するにあなたがこの世界に居るならば生きていようが死んでいようが関係無いのです。そして、イレギュラーが起こさぬように死んでいただくのが我々にとって一番よいのです」

「そう言えば、オレが死ぬと思うのか？」

「まさか、ただ教えておこうと思っただけですよ」

「・・・・・・・・」

オレが黙ったのを頃合にし。

「それでは、私達は退散させてもらいますよ」

妙な術式を開き、左慈を抱え術式の中心に立つ。

「劉備を助けたければ行きなさい、切り捨てるのならここに残りなさい。あと一ヶ月ありますので」

干吉は最後まで笑顔でそう言った。

奴らは消え、最初にオレを襲ってきた連中の死体も消えた。

携帯の時刻は『AM 4:00』、じきに日が昇る。

「切り捨てたいわけじゃない、ただオレに守ることができるのか・
・・・・・・・・」

曇った空を見上げ、オレはただ呟いた。

壱拾六 2つの選択肢（後書き）

と、言うわけでフラグが立ちました。

そろそろ、呉を出て蜀に向かいます。

その途中で一刀はある間違いに気づきます。

それが何なのかは、その先のお楽しみと言うことで。

質問等々などもお待ちしておりますので
よろしく願います。

壱拾七 袁術登場（前書き）

期末テスト（のようなもの）が終了しましたので、少し更新が早くなるかもしれません。

そうなるように努力します。

なので今後ともよろしくお願いします!!!

m () m

壱拾七 袁術登場

あれから、数日が過ぎた。

一刀は未だに選べずにいた。

「・・・・・・・・」

自室のベッドに座りでひたすら考えていた。

「オレの力は誰かを守れるのか？本当に北郷の力を得るのに相応しかったのか？」

言葉を口にしようとも答えはでない。

答えも何もない。

オレは、独りだから。

誰からの救いもなく、言葉もない。。

「ねえ、冥琳。一刀を知らない？」

「・・・・・・・・。まったく、雪蓮。今度こそ政務は終わったんだろ
うな？」

「うんうん、終わったよ」

「ふう。後で念の為に持ってきてくれ」

「むむ、冥琳、信用してないでしょ？」

「ああ、雪蓮だからな」

冥琳は悪戯っぽく笑って言った。

「ひどいな」

拗ねた子供のような雪蓮をなだめながら廊下を歩いていると、人だかりができていた。

「あれは、北郷の部屋か？」

「おい、みんな何やってるの？」

2人に気がついた人達（主に武将）がこちらを向いた。

「一刀が元気なくての、心配でここまで見舞いに来たんだが・・・」

・・・」

祭が困ったような笑いを浮かべる。

「蓮華は？」

雪蓮の問いに、やや焦りながらも答えた。

「さ、祭から北郷の元気がないと聞きました。病気だとまずいと思ったので」

「ちなみに私は、いつものお勉強できました」
穏がゆっくりとした声で言った。

「一刀ね、もう3日も部屋から出てないんだよ！」

小蓮が付け足すように言った。

「3日も・・・」

雪蓮は純粹に驚いていた。

「一体どうしたと言うんだ？」

私も理由が気になり聞くことにした。

「分かりませんでした」

と、いきなり現れた思春が言った。

「思春、何か分かったの？」

蓮華が期待を込めて見るが、思春は首を横にふった。

「扉が開いていないので、窓から入って見ましたがベッドに座ったまま微動だにしませんでした」

「原因も分からなかったか？」

「はい、ただ時々何かを呟いているのは聞こえました」

「何て呟いていたの？」

「分かりません、どこかの国の言葉のようで私達が知る言葉ではありませんでした」

思春もがっくりとしたようで。

「申し訳ありません」

そう言った。

死にそうじゃないか、お前。

またお前か
・
・
・
・
・
・
○

冷たいなく、
んで大丈夫か？

オレが大丈夫に見えるのか？

まったく。

それじゃ聞くなよ。

さーせん
W
W
W_o

●
●
●
●
●
●
●
はあ○

覇気が無いぜ？

こんな状況の時に覇気がある奴がいるのか？

逆境に強い、とかそんな奴らなら……。

そうか
・
・
・
・
・
・
○

オレは、彼女……劉備達を守ることができるだろうか？

モチ、当たり前事を聞くなよ
WWW。

何でだよ？

だって、オレはお前だぜ？

・・・・・・・・お前はオレ、か？

正解！オレ達は同じなんだ。だからさ、オレ達の力は理解してる。
本当は分かってんだろ？

だが・・・・・・・・。。

迷うかもしれない。

救えないかもしれない。

また失ってしまうかもしれない。

オレ達の声は重なった。

それでも1人じゃない。

オレはそう思った。

そうだぜ。1人じゃできない事も、仲間がいればそこそこ出来るんだからな。

行こうぜ！戦うのはオレ達は1人じゃない！

・・・・・・・・そうだな。今まで何を悩んでたんだろうな。

ああ、少し考えれば簡単だった。

大切な事を忘れるなんて・・・・・・・・。。

情けないことだ。

意識が覚醒する。

呉に来て慣れてしまった、客室だ。

「よし、雪蓮達に言おう。後数日で蜀に向かうって………」
吹っ切れたオレは、扉を開けた。

そこにいたのは女の子。

金髪で12歳ぐらいに見える。

「見つけたのじゃ！」

—冥琳視点—

時はさかのぼり、10分前。

雪蓮達を始め、呉の武将達は集まっていた。

本来の目的だと、『一刀は大丈夫か?』というものだったのだが。
ある来客によって一変する。

「来てやったのじゃ！」

兵士達を連れ現れたのは袁術だった。

荊州の太守でもあり、孫策を客将としている人物でもある。

見た目は金髪のロリっ子。

性格は、世間知らずな我侖。

「え、袁術殿。今日は、いかがなされました?」

冥琳が無表情な顔で聞いた。

ちなみに雪蓮と小蓮は極端に嫌そうな顔。

蓮華と思春は真面目な顔で穏は笑っている。

「うむ、実は孫策の所に『天界からの旅人』がいると聞いてな」
一同の表情が一瞬だけ揺らいだ。

それに目聡く気がついたのは袁術の付き人でもある張勳。

「おやあ? 皆さんの反応を見る限り今もまだいるようですねえ」
『!』

「ああ、凶星ですねえ」

明らかにこちらを煽る言葉であった。

が、しかし、挑発に乗るわけにもいかない。

「七乃、ここにいるのか？」

「ええ、いますよ。恐らく客室にいらっしゃると思いますよ？」

「くっ……」

冥琳は唇を噛む。

こいつらは、一刀を力尽くでも連れて行くだろう。

断れば脅すくらいは当たり前だろうし、馬鹿の袁術を上手く誘導して面倒でもある。

「わかったのじゃ、探しに行ってくるのじゃ！」

そう言って袁術は走り出した。

「まっ……」

孫策が走り出そうとしたが張勳によって止められる。

「いけませんよお、皆さんとは話をしなければなりませんから。あと兵士の皆さん……」

その笑いは理由を知らない者が見れば綺麗な笑いと言えただろう。だが自分達は知っている。その笑いは性質が悪い事に天然の悪意だということに。

「半分ほど袁術様の所に向かってください。念の為ですけどね」ここに袁術の付き人、張勳と呉の将達による心理戦が始まった。

「誰だ？」

もう1度言おう。

オレの前にいるのは、金髪で12歳ぐらいの女の子がいた。

「妾は袁術じゃ。おぬしは、『天界からの旅人』か？」

「ん、まあ一応。自分でそう名乗っているけど」

「うむうむ、大当たりじゃな」

満足そうに袁術は笑い。

「名前はなんじゃ？」

「北郷一刀だけど・・・・・・・・」

部屋の外は、武装した兵士達がいた。

「周りにいる人達は？」

「妾の護衛じゃ。まったく七乃も心配性で困るのじゃ」

ああ、だろうな。

この人達がいらない方がオレも気軽に喋れる。

「それでな、妾は・・・・・・・・」

無邪気な笑顔でオレを見ながら言った。

「一刀が欲しいのじゃ！」

壱拾七 袁術登場（後書き）

と、言うわけで袁術が登場しました。

そして、一刀はとうとう呉を去る事をきめます。

次回で呉編は終了。

次々回から蜀に向かいます！

感想、質問等々待っていますので
よろしく願います。

m () m

壱拾八 旅立つこと（前書き）

呉編、最終章。

これから応援よろしくお願いします！

あと、コメントをしていた人たちへのお詫び。

コメントの返信をするのを忘れていてすみませんでした！

m ((m

本当にすみませんでした！

（＊；ω人）ゴメンナサイ

（反、人、省人）ゴメンナサイ（人反、人、省）

壱拾八 旅立つこと

北郷一刀はこの世界にはいないはずの人間である。
イレギュラーな存在。

だが、彼が居る。というイレギュラーよりも、それ以上の問題は彼が強すぎた事。

もう何かを失いたくない一心で力を求めた。

力とはプラスだけではなく。

時としてマイナスにもなる。

「一刀が欲しいのじゃ!」

目の前の少女はそう言った。

「悪いけど、それは無理だよ」

オレは即答した。

「な、何故じゃ!?! 妾の所にすれば何でもあるぞ?」

少女は続ける。

「金も食べ物も武器も全てあるぞ!?!」

少女は自慢するように言う。

いや、事実としては自慢なのだろう。

それでも。

「そこには、オレの大切なものはない」

目の前の少女の目を見ながら伝える。

「オレは今から蜀に行かないと行けないんだ・・・・・・・・」

彼女、劉備との約束。

彼女がオレを必要としないならば再び放浪の生活。

けれど、放浪は悪くない。

1つに留まるよりも多くを見れる、知れる。

どちらにしても、オレは劉備と会いたい。

「だから、オレは蜀に行くんだ、だからオレは君と一緒ににはなれない」

オレが言い切ると少女は泣きそうな目で。

「そうか、一刀は妾が嫌いなんじゃな？」

「そういう訳じゃ……！！」

護衛兵の1人が斬りかかってきた。

「っ！」

ギリギリの所で回避する。

服が少し斬れたが命には代えられない。

「妾のモノにならないのなら、もういい！やってしまえ！」

その声と同時に袁術は逃げ出し、護衛兵は一斉に襲い掛かってきた。

—冥琳視点—

「それでは、何故『天界からの旅人』が居ることを報告しなかったのですか？」

この女、張勳は鋭いが時々であり全てがではない。

簡単にごまかす事ぐらひは容易いがもしも、一刀に何かがおきれば雪蓮も祭も黙っていないだろう。

無論、私とてただでは済まさない。

「それは、さっきも言った通り我々は彼を拾っただけで知らなかったのです」

「それでは、どこの誰とも知らない人を助けたのですか？」

「ええ、結果的にはそうなりますね。呉には、勝手な事をする将が3人はいますから」

雪蓮、祭、小蓮様の3人以外にはいない。

「そうですか、では仕方がないですね」

張勳は一度、言葉を切り。

「今すぐ『天界からの旅人』を貰う事にしますね」
『！』

その言葉の直後に袁術が戻ってきた。

「どうやら、一刀を見つからなかったようだ……」

安心したのはつかの間、1人の忍が張勳の横に立つ。

その忍が持っている物を見て絶句した。

「一刀の、荷物！」

「ええ、念のために。抵抗されては困りますから」

張勳は笑顔で告げた。

「それに、もしも『天界からの旅人』が袁術の御機嫌を悪くされた時の責任をとってもらうためです」

寄って来た袁術の頭を撫でながら、張勳は言った。

「それに、偽者かもしれませんし。そうだった時の為に皆さんの手間をなくしたんですから」

ドドドオオーン！

音を立てて、壁が吹っ飛んだ。

崩れたのではなく、吹っ飛んだ。

その場にいた一同は全員、穴が空いた壁を凝視する。

「うああ！」

「に、逃げろ。俺達が勝てる相手じゃねえ！！！！」

「殺される！」

壁の穴からは次々と護衛兵達が逃げていく。

「どきやがれッ！」

その声と共に、護衛兵の1人が壁の穴から吹っ飛び反対側の壁にめり込んだ。

数秒後、一刀が出てきた。

「あゝクソ、ったく。体を動かしてなかったから、上手く動かねえわ」

首を左右に傾け、首の骨の音が鳴る。

張勳の目の前で立ち止まり。

「あんたか？人がせっかく気分良く復活したのを邪魔したのは？」
「っ！」

一刀の殺気にあてられ、震えている。

「しょうがないですねえ。こうなったら私があなたを倒すとしましよう」

震えながらも、剣を抜き一刀を刺そうとする。

「やめろ！」

私は、叫んだがそれは無意味だったと数秒後に知る。

「やめろ！」

公謹さんの声が聞こえた。

けれど、その声を聞きそうも無い。

拳の先が剣の切っ先に触れる。

向こうが、じゃない。オレの方がだ！

「破ッ！」

ガキン！

目の前の女が持っていた剣が粉々に碎ける。

「！ うそ……」

「北郷拳闘術、第一の型。『刃殺し』」

名の通り、剣類の武器を目的とした技である。

ただし大剣に向けてやるとこっちの腕がヤバイ事になる。

が、大剣以外なら効果的という技で人体にやると拳の先にある骨が碎ける。

ちなみに連続では撃てないのが弱点で、更に銃弾にも対応できないのである。

鍛えれば不意打ちにも対処できるらしい。

「とりあえず、返しやがれ！」

忍の顔に一撃を叩き込む。

その忍も壁にめり込んだが気にしない。

荷物を担いで。

「うっし。準備完了、と」

「一刀？」

小蓮が心配そうにオレを見る。

「もう大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫だ！それに、自分のやる事がようやく見えた」

「やる事？」

孫策さんが聞く。

「約束があるんだ。オレがこっちに來て最初にした大事な約束が」

「ちよつと待って！一刀どこに行っちゃ・・・・・・・・・・！ 祭、離しなさい！」

祭が孫策さんを羽交い絞めにする。

「一刀、土産は酒で頼むぞ？」

「了解しました！」

祭さんは笑っていた。

「北郷、また会えるのだろうか？」

公謹さんが心配そに聞いてきた、けれど。

「当然だ！絶対会える！」

この答えは揺るがないから。

「穩！」

「なんですかあ？」

いつものようなおっとりした感じだ。

「またな」

「はい、また会いましょう。一刀さん」

ダッ、タッタッタッタッタッ

オレの相棒のシンが窓から侵入してきた、さすがだ！

「孫権さん、なんか迷惑ばかりかけてすみませんでした」

「気にしないでいいわよ。それよりも私達の方が迷惑かけたでしょう？」

「全然！オレさ、家族が爺ちゃんしかいなかったから家族が増えたみたいで楽しかった！」

その言葉に孫権さんは笑ってくれた。

そして、次に甘寧がオレを見ながら。

「北郷！せいぜい死なぬようにな……」

「おう、ありがとう」

言いながら、オレはシンに飛び乗る。

「行くの一刀？」

孫策さんは、寂しそうにオレを見る。

「ああ、行くぜ。でも、また会えるだろう？」

「……そうね。また……」

数秒、俯いた後に顔を上げて。

「よっし一刀！私から良いものを上げる！」

祭を振りほどき、大きく跳躍し。

シンの上に立って、オレ達は唇を重ねた。

「……」

数秒、言葉がでなかった。

「一刀、それと私達の事はこれから真名で呼んでいいからね」

「！でも、それは……」

「いいの。どこかに行っちゃうんだから、それくらいの我侭は良いでしょ？あと、……もね」

「……分かった」

押しに弱いな、オレ。

孫さ……いや雪蓮がシンから飛び降りる。

「行ってらっしゃい、一刀！」

「おう、行ってきます雪蓮！」

答えた後に、オレはシンと共に窓から脱出した。

—冥琳視点—

一刀が出て行って残されたのは静寂と少しの寂しさ。

「あゝ、やっちゃいましたね？」

張勲は明らかに嬉しそうに言う。

「これで、皆さんは裏切り者って事ですね？」

「それで何か困るのかしら？」

雪蓮が得意げに言う。

「とりあえず、裏切り者には死を。ですよ」

「できるの？ 剣もない、あなた達だけで？」

「ええ、外には多くの仲間がいますよ」

いつの間に！

窓から外を見ると確かに街の外に張勲の部隊が見える。

「くっ、性質^{たち}の悪い！」

「ちなみに私達を殺しても一定の時間が過ぎたら街を攻めるように言っているので無駄ですよ？」

「関係の無い者まで巻き込むつもりか！」

蓮華様も声を荒げる。

「勿論ですよ、それに皆さんは『天界からの旅人』を逃がしたんですから・・・・・・・・・・」

張勲は笑い。

「それと、今から『天界からの旅人』を連れ戻してくれれば辞めてあげますよ？」

ここまでなのか、外の兵士達は少なくとも10万前後。
今の呉では、足元にも・・・・・・・・・・。

「wwww」

雪蓮が小さい声で笑い出す。

「あらあ？ とうとう気が触れてしまいましたか？」

「あっはははは。そんなわけないでしょう？ただ、あなた達が滑稽だからよ」

「どういう意味です？」

張勲が目を細める。

「もしかして、私が何の考えも無く一刀を逃がしたと思った？違うのか？」

「まさか、雪蓮！」

思考がそこに至った。

「一刀も了承してくれたし、後は待つだけ」

オオオオオオオオツ！

ズドオオオン！

音と同時に地震のような揺れが来る。

「ほら、一刀は信頼できるでしょ」

「・・・・・・ああ、その通りだ」

私は近くにいた袁術達の親衛隊の兵の腹に肘を叩き込む。

「がっ！」

一撃で気絶した、軟弱だな。

「まったく、読めない奴だ」

言いながらも思春は、護衛兵の排除を行う。

「でも、それが一刀さんの魅力ですよ？蓮華様、雪蓮様」

「そうかも知れないわね」

呆れ気味に、でも楽しそうに答える蓮華。

「そうよ分かってるじゃないの、穏」

いつも以上に楽しそうに答える雪蓮。

姉妹そろって同時に答える。

「でも、一刀は私のだからね！」

小蓮様が声を上げるが。

『いや、私のだ!』

そして、何人かが同時に声を上げた。

さて、街の北の門に構えてる奴らをどうにかしないとな。

雪蓮には確かに、できるだけ数を減らす。

もしくは、戦力の半減。

……いや、今かなり良い方法を思いついたぜ。

西の出口から脱出し、呉の町から離れたところに向かう。

アレがここにあるんだよな。

そうアレだよ、アレ。

荒野を数分進み続けると、簡単に見つかった。

シンから降りる。

さて、やる事の中で大仕事なのはたった1つ。

「解氷剤!」

氷を溶かす魔法薬を使う。

ちなみに『壱拾四』で龍を見た後にいくつか作っておいたのだ。

動けるようになった龍は、オレに畏怖し逃げようとするが。

尻尾を掴んで自分ごと重力魔法をかけて動けなくする。

「まあ、待て」

「グオオオオッ! (訳..嫌だアアア、死にたくねえよオオオ!」

さすがに喋れないよな。

「オレと仲間になろうぜ? って、言ってる事分かる?」

「グオウ! (訳..仲間? 別に良いけど、あくでも。……だしな。

けれども…… (以下略)」

「構わない、と言ってますよ?」

シンがどうやら通訳できるようだ。

これで、大仕事はお終い。

仕上げだ。

「一般兵」

「しかし……本当、大丈夫なんですか？隊長」

「何がだ？」

「だって、『天界からの旅人』様をある意味侮辱してますよね袁術様」

「……」

「怒りに触れて、皆殺し。って事になったりしないでしょうかね、店長」

「隊長だ。それにそうなるろうとも、袁術様から裁かれるだろう」

「なるほど、そうなる時に裏切れればいいって事ですよね！総長！」

「隊長だ、それも選択肢の1つよ。あのような一無謀の塊（救いようのないバカ）にいつまでも従う方が危険だ」

「確かに、それに呉の方が待遇が良いって聞きますしね。団長」

「もういい。ああ、それに将の方々も皆素晴らしいと聞く」

「裏切るのに適したのが今回って事ですか？」

「そういう事だ」

隊長にも家族がいるからだろうな、と僕も思う。

「まあ、僕としても裏切る気は満ち溢れてますけどね」

そんな感じで空を見上げると。

グオオオオオオッ！

巨大な龍がいました。

こちらを見下すように龍は飛んでいる。

「隊長！上に誰か乗ってますよ？」

「何イ！！」

「聞けェ！袁術の兵よ」

矢も届かないはずの距離なのに上に乗った人の声がはっきり聞こえた。

「その前に君は誰だ！」

僕は聞いてみた。

「北郷一刀！『天界からの旅人』だ！」

「なるほど、ならば龍に乗っているのにも納得できますね。隊長」

「むう、確かに」

隊長は苦い顔をしていた。

「早い話、袁術を裏切れ！」

『賛成イイイイ！』

僕達は即答した。

「あんな我侘なガキが王でいいのか！？」

「迷惑だアアア！」

「度を知れ！ストレスの限界だア！」

「いい加減、腹が立つ！」

うむうむ、我が総大将の人気の無さが歴然だ。

「これは……お告げなのですか？」

隊長がそう聞いた。

「少なくとも、これ以上袁術についていてもお前達は破滅しかないだろう」

誰もが黙った。

あんな総大将が他の国に勝っているのは『兵力』『資金』のみで。

他は全て劣る。

街の活気も、繁栄も、食料や武器も、そして王こと袁術^{バカ}も！

「今こそ反旗を翻せエエエ！」

『オオオオオオオ！』

「やる事は分かるな……！」

『俺達のそう総大将は袁術^{バカ}じゃない！呉の孫策様だアアア！』

良い様に煽られたな。

無論、自分らにとっての良い方向に。

そう思う新人一般兵十隊長。

—冥琳視点—

「むっ！」

「どうしたの、冥琳！」

「雪蓮、あれをみてみろ！」

私達の視界に広がったのは・・・・・。

『袁』と言う漢字をつぶし、即席でつくられた『吳』と書かれた旗を掲げていた。

「ええええええ！！！」

張勳の叫びが虚しく響く。

「北郷め、やってくれたな」

「贈り物がすごすぎて驚いたわね」

私達は笑い合い、こつそりと出て行こうとする袁術と張勳を睨む。

「さて、こちらも片付けようか」

「そうね、喜びなさい。袁術、私の怒りをかった事を後悔しなさい」

その後、袁術は命からがら逃げ出す事に成功する。

が、しかし。恐怖のあまり漏らした事が呉全体に広がった。

そして、いち早く衰術はこの時代の負け犬となった。

その後の話では、どこかに袁術逃げ去ったそうだと。

壱拾八 旅立つこと（後書き）

と、いうわけで呉編、最終章。

大事なことなので2回言いました。

次回からは、蜀編に入ります。

でも、すぐに劉備達にあうわけではありませんので。

感想、質問等々待っていますので

よろしくお願いします。

m () m

壱拾九 黄巾党（前書き）

アクセス数500000突破。

皆さんのおかげです、ありがとうございます。

今後ともよろしく願います。

m () m

壱拾九 黄巾党

龍が早速だがへばっていた。

どうやら、復活してすぐは辛かったらしい。

と言うわけで結局シンに乗っての旅となった。

情報を聞く限りでは、北に突き進み魏の領地を越えた先に劉備達がいる州にたどりつくとの事。

「ついてないな」

「そうでもないじゃないですか？」

「まゝ、そうかもな」

龍が眠るときに角笛を貰ったのだ。

なんでも、友人になった人間にだけその角笛を渡すらしい。

その角笛を吹くことで自分ら龍を呼び寄せる事ができるとの事だ。

「あいつが全快すれば、かなりの時間短縮になるからな」

「そうですね、私も楽がしたいです」

そんな感じで会話をしていると、通行止めにあった。

壁などではなく、目の前で戦が繰り広げられているのだ。

片方は、もはや当たり前となった黄巾党だ。

もう片方は、見たことがない。

髑髏の装飾と黒をメインにした鎧を着ている。

「向こう側の事は知らないな。まあ、無理矢理に突破するんだしな」
日本刀と蒼紅の紅を抜き。

「突っ切るぜッ！」

「分かりました、落ちないように気をつけてくださいよ！」

「了解！」

1人と1頭が突入して行った。

どうやら男は黄巾党をとて嫌っているらしく。

「業火一閃！」

炎が更に攻撃範囲を増し、横に切り払われる。

るる剣のCCOさんのような炎を纏った斬撃と思ってください。

「よっし、決めた」

2つの剣を黄巾党に向けながら。

「黄巾党、お前ら全員。ぶっ殺す！」

殺戮宣言をした。

「消えやがれ！」

オレは力の限り炎の斬撃を放つ。

炎の斬撃は、刀身の何倍もの長さにもなって黄巾党を襲う。

「クソッ！」

「何なんだ、あいつは！？」

「魏じゃないが、俺達の敵には変わりねえ！」

「殺しまえええ！」

一刀に攻撃が集中し始めるが。

「焼き尽くせ！」

紅の剣に魔力を収束し敵のいる方向に向けて振るう。

ホムラドリ

「焰鳥！」

空を大きく一閃する。

刃から放たれた魔力は鳥の形になり突き進む。

そして、約30メートルほど離れた場所で盛大に爆発した。

その攻撃によって1000人前後は焼き尽くされた。

「壱式、烈震『大地の宴』！」

地面を踏みつけると、敵のいる地面がひび割れ突起状になった刃が

襲う。

北郷魔法術と北郷拳闘術を組み合わせた技だ。

魔法は苦手なオレでも、武器や体術と合わせて使えば魔法としても一応使える。

ただ、力加減ができないので威力や攻撃範囲が笑えない。

『大地の宴』、今の一撃は敵陣を中心とした半径100メートルを襲った。

「さすがに……もう少し手加減してもいいかな……」

「
おかげでオレの目の前の大地は、黄巾党の死体と荒れた大地しかない。
い。」

両手を合わせ、黙祷する。

例え敵であろうとも、無意味に殺して良いものではない。

それでも……自分の信念の名の下に戦って死んだ。

sonde、これは自分の死期を早めちまったバカ共へのせめてもの手向けだ。

「皆……！」

どこからか、戦に似合わない明るい声が聞こえた。

「悪者達は、もう疲れてるよ……！」

「今のうちに止めをさしちゃって……！」

明るい能天気な声が、ここまでオレの怒りを高めた事が過去一度もなかった。

そして、声の方向に目を凝らす。

声の方向には黄巾党に指示していると思われる3人がいる。

さっきの声もあの3人だろう。

「撃ち貫け」

剣を収め、銃を抜き魔力をこめる。

形状が変化しライフフルへと変わる。

「収束、刺弾」

針のような細い弾丸となり、声のする方向に襲い掛かる。

オマエタチニ、ナゼコワサレナケレバナラナイ。

魔方阵は広がる。

「死んで逝った者達は、二度と笑わない、泣かない、喜べない、あ
るの……」

思い出す。

大切な人を無くした時の自分を。

奪われて二度と戻らないと知ったときの自分を。

巨大な場所をつつむ陣が形成される。

そして、魔方阵から闇が吹き出す。

「ただ殺した者達への怨み、怒り、殺意。貴様らも殺してやる、と
決して許す事の無い憎悪の塊」

死んだ奴らの苦しみを、理解できてしまう。

だからこそ、一刀は苦しむ。

一刀の声は怒りにのみ感情があった。

自分は多くの悪人、敵を斬った。

ここに来てからだけじゃない。

自分のいた世界でも、だ。

悪人の定理なんて理解できない。

何が正義かと、迷った。いや、迷っているのだ。

怨まれる事も多々あった。

それでも、黄巾党との違いはあった。

難しくはない。

誰にでも理解できる、単純なもの。

黄巾党は、自分達さえ良ければそれでいい。そう考える。

全ては自分らが生きるための糧である、という自己中心的な考え。

誰かとじゃない、自分だけのため。

けれど、一刀は背負う。

自分の手で殺した者達の恨み、悲しみ、想い、意思を。

死んで逝った奴らの分まで生きよう、と。

その為なら喜んで汚名を被り、悪人となろう。

吹き出した闇は、刃状になり黄巾党に向かって襲い掛かる。

黄巾党の総大将と数十人ぐらいいは逃げ切れるだろうが、後は生き残る事すらもできないだろう。

「……………ただ、それでも死に逝った者達は。残された友人、恋人、家族に思うだろう」

魔方阵は消えて無くなり、黄巾党への復讐を終えた刃も消える。

「どうか、お前だけは生きてくれ、と」

何度も見てきた、自分の無力さで救えなかった人達を。

死んでしまった人達が、魂だけの存在になっても護ろうとする意思を。

そう言ってゆっくりと倒れる。

怒りに任せて魔力を使いすぎたか……………。

少し寝ようかな……………。

地面に倒れる瞬間、シンがオレの頭の下に自分の体をはさむ。

良い枕だな……………。

そんな事を思いながら意識を手放した。

一夏候淵（秋蘭）一

私は、『天界からの旅人』の言葉に少し驚いていた。

神の遣いと言うには、荒々しいが。

戦場に立つには、あまりに優しすぎるように見える。

殺すたびに辛そうな顔をするのが見えたのは恐らく私だけだろう。

私は『天界からの旅人』に近づく。

気を失っているようだ。

「寝顔は、まるで子供のようなのだが……………」

いくら強くても、この男は悪人にはなりきれないのだな。

そう思った。

その時の私は笑っていたと思う。

壱拾九 黄巾党（後書き）

魏に拾われた一刀。

目覚めるとそこは・・・・・・。

そんな感じの次回です。

感想等お待ちしております。

m () m

式拾 牢屋から脱出

・・・・・・？

意識が戻ってくる。

体が痛い。

地面が固いところで寝たからか？

つか、暗いな。

もう夜か？

起きたか？

またか、何のようだ？

面倒な事になったんだ。

ここに来てから面倒事の祭りみたいなもんだろ。

そーなんだが、今回は今までの奴よりヤバイ。

何があったんだ？

捕まった。

？ 誰にだよ？

男が嫌いで有名な曹操にだ。

・・・・・・マジかよ。

呉で噂ぐらい聞いた事があるだろ？

ああ、聞いたな。

簡単に言うとそのいつに捕まっちゃったんだよ。

脱出はできなのか？

みて見ろ。

オレは意識がはっきりとした。

薄暗い牢屋で視界を助けるのは蝋燭1本のみ。
鞆どころか外套すらない。

しかも臭い、頭がやばい事になりそうだ。

臭いがついたら嫌だから早く出たい。

わかんと思うが脱出できない。

魔力で破壊して突破は無理か？

昼頃に撃った、あの一撃の反動であと4時間は使えないな。

そもそも、アレはオレ自身の魔法じゃない。

殺された人の恨みや呪いなど力だ。

あれだけ、負の力を使って反動が4時間は軽い方である。

4時間……、微妙だな。

だが、内ポケットを見てみる。

オレは言われた通りに内ポケットを見る。

携帯小説っぽい物とナイフがあった。

ナイフは鞘がしてあって、ちょっと名刀みたいな感じがする。

携帯小説っぽい方は、冥琳がくれた絵本のようなもの。

何でも文字を覚えるのなら、文字と絵が一緒にあった方が覚えやすいからだ。

本で時間を潰して、この牢屋を開けにきた奴がいたら開けた瞬間にナイフで脅す。

なるほど、確かにいい作戦だな。

だろ？それに人質にすれば荷物奪還も簡単になるしな。

・・・・・・そうだな、そうするか。

おk、んじゃオレは寝る。死ぬなよ一刀。

そう言っただけオレの中から声が消えた。

あいつは何なのか？

もう1人のオレの人格なのだろうか？

そもそも、なぜオレが1人の時にしかあの人格は接触して来ないのか？

考えながら横を向くと死体があった。

1人だけでなく、5人ほどのだ。

臭いの原因はコレらしい。

けれど、何故死んだにも関わらず埋葬もせずここに・・・・・・？
疑問は残るだけであった。

一夏候淵（秋蘭）一

「・・・・・・・・以上です、華琳様」

荀？（真名・桂花）が説明を終える。

「なるほどね、『天界からの旅人』とやらは既に死んでいた、と」

「ええ、男といえども仮にも天界の者。出来る限り良い方法で死体を始末させました」

桂花が華琳様に献上した『天界からの旅人』の荷物。

あの後、私が黄巾党の首領を捕まえ戻ると桂花が既に連れて行っていたのだ。

華琳様は、以前から『天界からの旅人』に興味を示していた。

だからだろう、気絶している隙をつき荷物を奪い献上する事で華琳様から褒美を貰う。

恐らく『天界からの旅人』はどこかに閉じ込めている。

簡単には出られぬように。

「よくやったわね、桂花」

「はい、華琳様の為ならなんでも・・・・・・・・」

桂花は顔を赤らめながら褒美を待っていた。

「ところで、秋蘭？」

華琳様が不意に声をかけられた。

「・・・・・・・・はい」

「あなたはどこか落ち着かない様子だけど？」

「・・・・・・・・少し疲れているだけです」

「大丈夫なの？よく見れば顔色も良くないようだけど・・・・・・・・」

「ご心配をかけます」

事実、体が少し重い。

『天界からの旅人』が出した、あの黒いなにか。

アレを見てから、食欲も失せてしまった。

「僕は会って見たかったな・・・・・・・・」

不意に許緒（真名・季衣）が言った。

「私も会って見たかった・・・・・・・・」

それに季衣の幼馴染の典章（真名：流琉）も同意した。

「あなた達、正気？」

それを桂花はおかしな物を見るような視線をぶつけた。

「見ただけで分かったわ。あの男は、天界の者というだけの獣だつてね！」

桂花が吐き捨てるように言うが。

「そんな事ないよ！皆言ってたよ、優しい目をした良い人だって！」

「騙されているのよ、『天界』という言葉にね」

季衣は次第に泣きそうになるが反論をやめなかった。

「おい、桂花！」

姉者が声を荒げた。

「ここまで、季衣が言っているのだ！お前の間違いじゃないのか！どうやら季衣を泣かせた事が姉者の怒りに触れたらしい。」

「見たことの無い季衣と実際に見た私ではどちらが正しいか一目瞭然でしょ？」

確かにその通りだが。

「桂花、そこまで季衣と流琉の恩人を否定する事はないんじゃないのか？」

桂花はようやく気づいた。

私の後ろで手を握って俯いている、流琉の姿に。

「っ！でもそれが、真実なのよ！」

どうやら桂花はどうあっても否定したいらしい。

どうしよう無い、そう思って回りを見ると3人ほどいなかった。

「後、1時間と3分か……」

見張りどころか、だれも来ない。

ついでに言うと、蝋燭も消えて真っ暗になってしまった。

臭いで頭も痛くなってきた。

ガチャン

扉が開く音がした。

「うっ、ひどい臭い」

そんな声が聞こえた。

「大丈夫ですか？」

間延びした声が聞こえた。

穏ほじやないが、間延びした声を聞くと何故か落ち着く。

臭いも扉を開けたおかげか、薄くなっている。

足音からして3人か？

3人がオレの牢屋の前に立った。

暗くてよく見えない。

「本気ですか、風？」

「ええ、さすがに『天界からの旅人』様に失礼すぎるので」

「そんで、この錠を壊せばええんか？」

間延びした声と普通の声と関西弁の3つ。

「はい、お願いしますよ」

間延びした声の後にドリルの音がして、牢屋の錠が壊れた。

そして、扉を開き。

「生きてますか？」

声をかけてきた。

悪意を感じないので、こちらもゆるい感じで返してみる。

「なんとかなく、臭いし、腹は減るし、真っ暗だし、荷物は無いし。最悪だ」

「文句はやった本人に言ってほしいのですよ」

「そうさせてもらう」

いい加減何も見えないので。適当に手を伸ばす。

「ひゃっ！」

何か柔らかい何かが手に触れた。

「すまん、目が見えないんだ。明るい所まで連れて行ってくれないか？」

「あ、あ。で、でしたらもう少し上の肩を掴んでくださいい……」

「どうやらショックを与えてしまったらしい。」

「おお、兄さんやるなあ」

「ふふふふ、稟ちゃんには良い経験ですね」

「どういう意味なのだろう？」

「引っ張られ、階段を登り明るい所に出る。」

「どうやら牢屋は地下だったようだ。」

「自分のにおいをかぐ。」

「大丈夫やで」

関西弁の声の主は、露出の大きい服装(?)をした紫色の髪をした少女だった。

肩にドリルのような槍を担いでいた。

「まったく臭くないですよ」

間延びした声の主は、頭に何か分からん物を乗せた金髪の少女だった。

「だ、大丈夫ですよ」

「んで、こっちのおどおどしているのがもう1人か……」

メガネをかけているんだけど、髪は茶髪かな？」

「どうやら、あの魔法の影響は視覚にまで影響するらしい。」

「ありがとう助かったぜ」

「いえいえ、お礼はこっちの稟ちゃんに言ってあげてください」

「わ、私!？」

「でも、稟が見つけたやろ?ここ」

「見つけたってそんな隠されてみたいに……」

「そう思って牢屋の入り口を見ると、床石をどけて入る隠し部屋になっていた。」

「どうりで風もなにも無いわけだ……」

頭をかきながら、疑問を聞く。

「そうだ、オレは北郷一刀。一刀って呼んでくれ」

「私は程？ですよ」

「わ、私は郭嘉です」

「うちは李典や」

腕を回しながら、問いを続ける。

「何でオレはここに？」

「桂花のせいですよ」

メガネを数ミリ上げて郭嘉が言った。

「？ 何でそいつがオレを？」

「華琳様、曹操様は以前から『天界からの旅人』に興味を示していました」

「オレに？」

「けれど、男の方なので桂花は嫌っていました……」

「それですね、お兄さんが気絶したのを良い事に死んだ事にしてですね」

郭嘉の説明を受け継いで、程？が続ける。

「お兄さんの荷物を献上したんですよ」

「おいおい、困るぜ。アレには大事なもののばかり入っているのによ……」

「そこで、稟ちゃんがそんなのは良くない！って、言ったんでお兄さんを助けに来ました」

「へー、でもよく分かったな。地下だったのに……」

「そこは稟ちゃんが華琳様に……」

意地の悪い笑みを浮かべて郭嘉を見る。

「そ、そんな理由ではありません！」

郭嘉が顔を赤らめながら必死になって否定していた。

2人のやり取りを面白そうに見ていると、李典が袖を引っ張った。

「これ兄さんのやろ？」

そう言って渡されたのは、銃だった。

「サンキュー、ところでこれをどこで？」

「ちよつとな、まあ企業秘密ってことでここは1つ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・分かった、礼はするよ」

さっさと荷物を返してもらわないとな・・・・・・・・。

ぐ~~~~

だらしの無い腹の音が響いた。

「できればなんか食わせてくれないか？」

3人に笑われながら、オレは部屋に連れて行かれた。

「お、よく食べますね」

「さすがは男性ですね・・・・・・・・」

無邪気な少年のような表情で食べる一刀の顔は。

「どちらかと言うと、少年って感じやな」

李典が笑いながら言った。

食えば食うほど、魔力の回復も早くなっていくのが分かった。

このままなら、食い終わる頃には全快してるだろう。

そんな事を考えながら、料理を食べていた。

郭嘉と程？の2人が作った料理はかなり美味かった。

体調も良くなったことだし・・・・・・・・。

椅子から立ち上がり、服装を直し覚悟を決める。

「・・・・・・・・行くか・・・・・・・・」

そういえば、ここって何処なんだろう？

いや、曹操のところってのは分かるよ。

そういう事じゃなくて、こう、具体的な・・・・・・・・。

式拾 牢屋から脱出（後書き）

3人に助けられた一刀。

次回、一刀が華琳に会いますよ。

ついでに桂花には復讐を、秋蘭にはお礼を。
ってな感じです！

感想、質問等々待っていますので
よろしくお願いします。

m () m

式拾巻 復讐成功！（前書き）

とりあえず、言います。

桂花ファンの皆様すみませんでした。

貳拾壹 復讐成功！

魔力が溢れる。

そして、駆け巡る。

肩から腕、肘から手、指先へと。

そして、肩から首を通り頭。

最後に下半身へと魔力が通り、体が魔力で満ちる。

「全快だな……」

手を閉じたり、開いたりしながら感覚を確かめる。

「さて、復讐するか」

悪意に満ちた笑いを浮かべた。

一夏候淵（真名…秋蘭）一

口論がまだ続いていた。

華琳様も桂花の男嫌いを知っている。

だが、季衣と流琉が『天界からの旅人』に村を救ってもらったのも知っている。

「どうしたものかしら……」

少し困りながら頭を抱えていた。

楽進（真名…凧）と子禁（真名…沙和）の2人は、来ていない李典の事を心配している。

ギイイイイイツ

扉が開いた。

入ってきたのは、風と稟だった。

「遅くなってしまうました」

「・・・・・・・・・・」

風はいつも通りなのだが、稟の桂花を見る目が冷たすぎる。

「・・・・・・・・・・どこへ行っていたのかしら？」

どうやら華琳様も桂花達の口論に疲れたらしく話の向きを変えた。

「はい、お客様の対応をしていました」

「？ お客様？ 私は聞いていないのだけれど？」

「ええ、桂花が連れ込んでいました」

「ッ！」

稟の言葉にまさか、という表情をする。

「桂花が？」

「はい、ですが桂花のもてなしが気に入らなかったようでして・・・

・・・・・・・・

「変わりにあなた達が？」

「はい、それはもう酷く怒っていたのですよ」

一斉に全員が桂花を見る。

「ま、まさか。風、あなた・・・・・・・・」

「そうですよ、華琳様にお会いしたいと言っていました」

「それと・・・・・・・・桂花にもお礼を。そうも仰っていましたね」

扉の方からゆっくりと近づいてくる気配があった。

先に扉をくぐったのは李典（真名…真桜）でその後ろには・・・・・・・・

。

大きなつぎはぎで直したような服を着た男性。

服装は黒い服で顔も隠れるように髪はおりている。

「・・・・・・・・・・アアアアアアアアアアアア・・・・・・・・」

「

言葉のようでそうではない、何かが口から漏れていた。

「ひっ！」

桂花は怯えたように見ながらも強気で言った。

「わ、私は客人なんて連れ込んでいないわ！それにそんな男・・・・・・・・

・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・アアアアアアアア！・・・・・・・・・・」
ゆっくりと腕を交差させていく。
そして、腕を交差させると・・・・・・・・・・。

ボワッ

幻のような光が走り、手には剣が握られていた。
双剣であるには違いないが、片方の剣に三本の刃。
つまり、六本の刃を持った武器を取り出したのだ。

「な、何なのよ！こいつは」

桂花が焦りながら聞くが、風はゆっくりした声で。

「うーん、風達が見つけた時にはもう体が冷たかったんですよ」
「ええ、そして気がつけば体が冷たくなった本人と同じ姿がもう1つ」

怪談を聞かせるように言葉を続ける。

「そして、うちの螺旋槍も効かずここに連れてくるしかなかったんや・・・・・・・・・・」

「え、そ、それってつまりゆ、幽霊？」

季衣が口にすると同時に姉者の後ろに隠れる。

「ゆ、幽霊などと言うものが存在するはずが・・・・・・・・！」
と、姉者も怖がっている。

「か、華琳様に近づくな！」

姉者が季衣を私に預け、大剣を振り下ろすが。

ギギギギギッ！

片方の剣で受け止められてしまった。

そして、数秒のせり合いの末に姉者が吹き飛ばされた。
「ぐっ！！」

姉者がそう言うという事は、そこまで力が強いのだろう。

片膝をついた姉者に近づく。

「・・・・・・・・」

そして、手を差し伸べた。

「む・・・・・・・・ありがとう？」

姉者もさすがに意味が分からないようだった。

無論、私にも分からん。

そして、次に双剣をゆっくりと交差させながら桂花との距離を詰めていく。

「アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

うむ、とりあえず怒っているようだ。

「桂花、あなた何をしたの？」

「それについては、風達から説明しますよ」

桂花に語らせる暇も与えずに風が説明をし始めた。

「桂花はですね、倒れていた『天界からの旅人』さんを見つけたのですよ」

「そして、桂花が華琳様に献上した物。これは彼の持ち物です」
稟が付け加える。

「桂花の牢屋でのもてなしも気に食わんみたいでな。うちらが牢屋を見つけた時には冷たく・・・・・・・・」

真桜も説明を続ける。

「なるほどね・・・・・・・・」

華琳様は納得したように頷く。

「彼は閉じ込められた、成れの果て。と言う事になります」
稟は少し悲しそうに俯いた。

風の説明を終える頃には、もう既に桂花の前だった。
転んでいる桂花を見下すようにしながら、双剣を振り上げる。

「しょうがないわね、殺さない程度の復讐なら許すわ」

華琳様がそう言う。

「・・・・・・・・アアアアアア」

地面すらも砕きかねない威力で振り下ろした。

「い、嫌ああああ!!!」

そう叫びながら、桂花は漏らしてしまった。

双剣は、桂花から10センチの余裕を残して止まる。

「くっくくく」

男は笑いをこらえて震えていた。

「あっははははは!」

大爆笑だった。

「な、何よ! 何がおかしいの!？」

ボワッ

再び幻のような光が走り、つぎはぎの服も双剣も消えた。

私と会った時とほとんど同じ服装に戻っていた。

「いや、だって。なあ？」

「せやなあ」

真桜と顔を合わせながら。

「いい年のくせに……………」

「漏らすなんてなあ？」

2人は再び笑いながら、顔を見合わせる。

「ななななななっ!」

華琳様も顔を逸らしながら笑っていた。

転んだままの桂花を見下ろしながら男は言った。

「うちの決まりでな、やられた事は倍にして返せ。恩や借金。無論、

嫌がらせと復讐もな？」

桂花を見下ろして、短く笑った後に私を見る。

「えーと、とりあえずありがとう」

「? 何のことだ？」

「いやだって、オレが一撃をぶつけてやった後も連中がまだいただろ？」

「なるほどな……………だが、私は助けるつもりがあったわけ

ではない」

「黄巾党を倒すためだろ？でも、結果的にオレは助けられたんだ」

「……」

「と、言うわけでお礼をしたいんだ」

「いや、遠慮させてもらう」

申し訳ないが、助けようと思ったわけでないのだ。

礼を受けるわけにもいかない。

「……そうか。と、言うわけでお礼をしたいんだ」

「え？あ、いや、遠慮させてもらう」

聞こえていなかったのか？

「……そうか。と、言うわけでお礼をしたいんだ」

「いや、だから……私は遠慮させてもらう」

今度こそはつきりと言ったぞ。

「……そうか。と、言うわけでお礼をしたいんだ」

「ま、またか!？」

以下100回前後ループ

アレですよ、いいえを選んだらストーリーが進まないやつ。

「……そうか。と、言うわけでお礼をしたいんだ」

「分かった。分かったからその言葉はやめてくれ」

今の私は、酷い表情をしているのではないかと思う。

「す、すごい。秋蘭様が……」

季衣、普段の私を何だと思っている。

流琉も驚いた表情はやめてくれ。

「さすが天界の人間ね。秋蘭があんなにあっさりと……」
あっさりではありません、苦勞の末です華琳様。

私に向ける少年の無邪気な笑顔が唯一の救いだったのかもしれない。

「ん？どうした？」

うむ、無邪気だ……。

式拾壺 復讐成功！（後書き）

そんな感じで、次回で秋蘭へのお礼です。

何気に気が合う、真桜と一刀。

やや年上な感じで見守る風。

ある意味、季衣とそっくりだなと思う秋蘭。

次回もそんな感じで行きます。

ところで、一刀の幽霊の真似の元ネタ分かる人いましたか？

感想、質問等々待っていますので

よろしくお願いします。

m ((m

式拾貳 うむ（前書き）

待たせたな！

あ、待ってない？

そうか、ごめんなさい。

顔文字が多いが気にしてはならない。

式拾式 うむ

あまりに早く目が覚めた。

この世界に来てからは、夜更かしできない。

する理由がない！

全くもって、よろしくない事だ！

夜更かしできないなんて、夏休みなのに遊べないのと一緒にだ！

何故、夜更かしができないか？

決まってるだろ！

皆、基本的に寝てるんだよ。

だから、誰も相手にしてくれません。

呉の時は、祭に酒に誘われて夜更かしはしたが毎日ではない。

そんな妙なテンションで目覚めた、オレ北郷一刀。

携帯電話の充電が未だに無くならないので時間の確認には困らない。

AM 4・30だって。

誰も起きてねえなwww。

いい加減、自分でも妙なテンションに疲れてしまい体を起こす。

大剣を背負い、蒼紅の双剣と日本刀を腰にさして、銃を装備した。

意味はないがな。

「あゝ、バイオやりてゝ。5買ったばかりなのになゝ」

適当に頭に思い浮かんだ事をいいながら、出歩く。

中庭のような所に出たので適当に座っていると、猫が集まってきた。

「ねこかわええなゝ」

ほのぼの感を全開でなごんでいた。

結局、黄巾党との接触を避けながら進んできたが。

魏の方々からも必死に逃げ、かなりの時間がかかってしまった。

「主、そろそろ劉備達のいる場所に近づいてきましたよ」

何も反応がない。

「？」

不意に立ち止まり、自分の背中を見る。

主どころか、荷物もひとつもない。

「まさか……」

いや、確実に。

落としてしまったようだ……。

「どーしょ」

立ち尽くすしかなかった、シンであった。

「あれ？あなたは……」

不意に声をかけられた。

—夏侯淵（真名…秋蘭）—

朝日が目に入り、目を覚ました。

今日は、いつもより少し遅く起きたようだ。

姉者が珍しく起きている。

「しゅらん？」

寝ぼけているが、一応起きているのだろう。

「どうした、姉者」

「扉の前にいるのは誰だ？」

まだ、眠たそうに間延びした声で言った。

「扉の前？」

そこには、当然のように北郷一刀がいた。

昨日とは違う、黒い服だ。

「北郷、何だそれは？」

「オレのところでスーツって呼ばれてる物だよ。一応、正装だから着

てみた」

ネクタイを直すような動作をした後。

「朝食できたんだ、良かったら食べてみてくれよ」

「あ、ああ」

「ついでに、そっちも起こさないとな」

姉者が二度寝を始めていた。

食事の席には、将が全員が集まっていた。

「あら、秋蘭。遅かったわね」

「寝坊してしましまして……」

華琳様は、機嫌が良さそうに見える。

「朝食を作ってくれるみたいよ？」

北郷を指差し、嬉しそうに言った。

「つーか、もうできてる！」

「あんた料理できるの？」

桂花が喧嘩を売るように、言うが。

「お前の百倍はできる！！」

「な、なんですって！？」

北郷も挑発に乗ったようで、笑いながら言い返した。

「だが、お前には食べさせないがな」

「ふ、ふん！どうせ美味しく作る自信がないからでしょ？」

「（。Д。）」

「何よ！何とか言ったらどうなの」

「（「！、」）」

「いい加減にしないと、本気で怒るわよ！！！！」

「」（「ー、」）「」

それが桂花の怒りの限界だったのか、懷に収めていた短剣を取り出す。

「もう限界よ！死になさい！」

短剣を持って駆け出す桂花に特に焦った様子も無く。

「うゝん・・・・・・・・ハンバーガー、4個分ぐらいかな」
何処からとも無く現れた、教祖様の投擲用ハンバーガーをぶつけてやる。。

「!!!! 痛ッ!!」

あれって、威力高いよな・・・・・・・・。

声にならない声、その表現が一番正しいように思う。

そんな桂花には、見向きもしないで。

「そんじゃ、朝食並べるから待っててくれ」

そう言って、厨房に向かったオレであった。

式拾式 うむ（後書き）

次はいつ投稿できるか、ワカラナイ。
今後ともよろしく。

式拾参 黄巾党との戦い・前（前書き）

ようやくひと段落できたので
久々に書きました。

貳拾参 黄巾党との戦い・前

一夏候淵（真名…秋蘭）一

あれから少し時間が経ち、私と北郷が街の警備に出かける事になった。

北郷の私服のせいか先程から目立っている。

「食い逃げだ！」

街の賑わいが一瞬だけ消え、男がこちらに向かって走ってきた。

「オラァ、どけどけえ！邪魔だ！！」

男が自分の目の前にいた北郷を殴ろうとした、が。

拳を避け、左手で手首を掴み、右手で胸倉を掴み地面に叩き伏せた。

「ぐえ！」

蛙が潰されたような声を上げて男は気を失った。

「食い逃げって初めて見た……」

「そうなのか？食い逃げをする者もないほど、天界は豊かなのか」

「いや、食い逃げをした奴を始めて見たってただだよ。食い逃げ自体はあったからな」

少しだけ間が空く。

「北郷はどんな所に住んでいたんだ？」

「学校って……分らないか。寺子屋のような所に寮があってそこに住んでいたな」

「という事は、北郷は学業の師だったのか？」

「その逆、教わる側だよ」

「北郷ほどでも、教わる側なのか。それに天界の学業は興味深いな」
そんなに興味を持つものかな？

小学生の頃からの勉強を思い出す、が。

「いや、うん。多分、どこも面倒だな」

1人納得する。

警備を終えて、街の外れまで散歩で出かけてきていた。

あの時と、呉の時と同じように大剣を掲げる。

「今日は・・・・・・快晴か。警備の時もだったが暑いな」
大剣をしまい、銃を取り出す。

この銃は師匠特製で形状変化型の魔法銃。

いくつかの種類に変化するが、使い分けるのは面倒だよな。
そもそも、オレは火力重視だし。

いや、それよりもだ。

夏候淵に対してのお礼だ。

恩は早めに返しておきたいが、劉備を助けに行きたい。

無論、奴が言っていたことが真実ならだが。

「あ・・・・・・！」

「ん？」

声の方向を見ると、体中傷だらけの女の子がいた。

「楽進だったよな？」

「はい！」

元気な奴だ。

「どうしたんだ、ここ街の外れだろ？」

「えっと、北郷殿に稽古をつけて頂きたく・・・・・・」

「嫌だ」

「えっ！？ど、どうしてですか？」

「やる理由がない、オレに利点がない、疲れる」

「そ、そうですか・・・・・・」

落ち込む仕草は子犬に見えなくも無い。

頭に手を置き、乱暴に撫でてやる。

「それじゃ、オレはやる事があるからな」

足早に立ち去る。

「あっ・・・・・・」

彼女の声が残念そうに聞こえた、まったくオレは自意識過剰だな。

城に戻ると、なにやら空気が張り詰めていた。

「よお、どしたの？」

「・・・・・・・・・・」

荀？はどうやら機嫌が悪いらしい。

ものすごい睨まれた。

夏侯淵に聞こうした時。

1人の兵士が息を切らしながらやって来た。

「曹操様！」

「・・・・・・・・・・どうしたの？」

「新たな動きがありました！」

？ 新たな動き？ 黄巾党か・・・・・・・・・・？

「状況は？」

「やはり黄巾党がかなり有利のようです。劉備が押し負けるのも時間の問題かと！」

「劉備！？」

兵士どころか、全員がオレを見る。

「え？待て。とりあえず、どういうことだ？」

軽く混乱しながらも、兵士に問いかける。

「え、はい。現在、我が国境近くで劉備の軍と黄巾党が戦っているのです」

「・・・・・・・・・・戦う、ね」

少し考えながらも続きを聞く。

「国境近くにはいくつかの村がありまして、劉備の軍を破った場合・
・・・・・・・・・・」

「魏の村が狙われる、と」

まあ、近くにあるからな。

「その村の戦力は？」

劉備が負けた事を前提として聞いてみる。

「はい、その・・・・・・・・・・」

兵士が言うべきか悩んでいる。

「無いに等しいわ」

すると、曹操が答えてくれた。

「マジかよ」

「ええ。最近できたみたいだから、そこに村があるのを知ったのも数時間前よ」

「・・・・・・・・・・」

少し考える動作をした後、顔を上げる。

「そっか、んじゃ。行ってくるわ」

片手を軽く上げ一刀は言った。

全員がフリーズした。

一刀を嫌っている荀？ですらだ。

大剣を背負い、扉に向かう。

「ま、待ちなさい！一刀！」

「ん？ どーしたよ？」

「あなた1人が行って、状況が変わると思ってるの？」

「まーな、意外と何とかなるもんだぜ」

「・・・・・・・・呆れた。あなたってバカなのね」

「大正解。オレはどうしようもない程の大馬鹿ですぜい！」

笑いながら、嬉しそうに答える。

「それにさ」

「？」

「約束したんだよ」

「約束？」

「おう、どうしようもない程の大馬鹿は大馬鹿なりのやり方で助けてやる。的なる事を言ったような気がするんだが・・・・・・・・・・どーだったかな？」

「私に聞かないでよ」

「それもそうか」

と、笑って答えた。

「何にしても約束は守らないとな」

言うと同時に駆け出し、城壁から飛び降り民家の屋根などを飛び移りながら行った。

「まったく、呆れた男ね」

「その通りですね、華琳様」

何人かは、同意の声を上げて、他は頷く。

「ちなみに出撃準備は整っていますよ」

いつも通りでのんびりとした風の声を通った。

「そうね、なら万が一を考えて出撃………するべきかしら」

曹操はイタズラをするような笑みを浮かべる。

「そうですね。万が一を考えて出撃しましょうか」

夏侯淵も同じく笑みを浮かべながら言う。

「し、しかし、華琳様！」

「伝令です！」

荀？の声を遮り、新たな兵士がやって来た。

「現在、劉備軍とぶつかっている黄巾党に張角らがいるとの情報が入りました！」

「うむ！たいみんぐが良いな！」

「？ 姉者。『たいみんぐ』とはどういう意味だ？」

「北郷が使っていた言葉だが？」

意味は分かっているのに使っていたのか。一同は思ったが口には出さない。

「そ、それでは、華琳様」

夏侯淵が無理矢理、話題を変える。

「ええ、黄巾党との戦いを終わらせに行こうかしら」

式拾参 黄巾党との戦い・前（後書き）

次回、華琳様が動きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7002h/>

自由人北郷一刀の物語

2011年2月20日11時09分発行